



ユウこと、ユーロシア・アルコットは前を歩く黒衣の青年、カロン・F・イルナリスの背中を追う。歩く動きに合わせて緩く波打つ明るい栗色の髪を飾る青いリボンが風に踊り、どこか楽しげだ。そう思わせるのはそれだけでなく、澄んだ空のような蒼の瞳は期待に輝いている。

「ねえ、カロン」

前を歩く恩人でもある青年に声を掛けると、彼は振り返らぬまま、

「何だ？」

と、無然とした声で答える。

ユウは少し早足で彼の横に並び、その横顔を見つめる。ユウの背は平均的だが、彼の方がやはり背が高いので、見上げる形になる。

髪色は黒に近い暗紫。染めている訳ではなく、地毛だというから驚きだ。そして、瞳は北方の氷雪を思わせる淡青色。だが、ユウはカロンが冷たい人間でないことを知っている。

「どこに向かっているの？」

別に付いて来いと一言も言われていないが、不機嫌な顔で闊歩するカロンの姿を見付け、思わず付いて来ている次第ではある。しかし、どこに向かっているのかさっぱり見当もつかない。目的がわからないのももちろんだが、それ以上に土地勘がない。

ユウたちが歩いているのはフロイス市議会連邦に属する市、グランベルに設立されたトライ・クローチェ魔法学院の広大な敷地の一角だ。土地勘がないのは当然で、ユウは昨日ようやく学院の寮へ荷物を運び込むために来たばかりの新入生。

カロンはというと、彼の場合は 신입生 といふとやや語弊がある。確かに、今年新たに入学する訳ではあるが、実を言うと四年前に在籍していて、退学になったことがあるらしい。退学の理由を詳しく敷いたことはないが、カロンの両手首をつなぐ鈍色の鎖を見れば、結構重大なことをやったのは推測できる。

「……教員詰所だ」

視線だけをユウに向け、言葉少なに答えたカロン。ユウは教員という単語を聞き、そして、ある程度の理由に思い至った。

「ツキノ教官に呼ばれたの？」

「ああ」

当たっていたらしい。即座に頷きを返したカロンは眉間に寄ったしわを黒い手袋に包まれた指で解し、

「用事があるから来いと、式神を寄こされた」

「式神……って、東方で無機物の使役に使う魔法だっけ？」

「そうだ」

ユウは入学前にカロンに散々仕込まれた知識の中から該当するものを引っ張り出すと、カロンが正解を告げる。ユウはそのことがなんだか嬉しくて頬を緩ませるが、カロンの不機嫌そうな顔を見て慌てて表情を引き締める。

「でも、わざわざ魔法を使ってまで呼ぶからには大事な用なんじゃないの？」

一応言ってみるが、ユウよりも遥かにツキノの人となりを知っているカロンは首を振り、「あいつの用事で本当に大事だった場合、自分で出向くさ。そうでない以上、下らない雑用と推測できるからな」

「ああ……」

ツキノとは二ヶ月程度の付き合いだが、カロンの言わんとしていることは理解できる気がした。だから、曖昧な答えを返し、苦笑して見せる。

カロンはそんなユウの表情を横目で見、いつまでも不機嫌になっていても仕方ないと判断してか、唐突に話題を変えた。

「入学そのものはまだ先だが、ここには慣れそうか？」

「う～ん……まだ着られてるって印象が強いから不安だけど、カロンたちがいるし、大丈夫だと思うよ？」

自分で言う通り、支給された黒を基調とした制服はまだ馴染まない。体に、というよりは、心がまだここにいるという実感を得ていないのが半分と、期待のあまり浮ついてるのが半分といったところだ。

「まあ、お前ならどこにでもすぐに慣れるだろうが、何時までも私たちにべったりという訳にも行かないだろう？ ただでさえ、お前の立場は微妙なんだから」

「立場ね……」

まあ、カロンの言うことももっともだとは思。彼に叩き込まれた知識のおかげで入学試験は断トツの成績で通過出来たし、それ以前にこの黒衣の魔法使い・カロン・F・イルナリスの弟子という立場がある。カロンの有名さは退学の件もあるにはあるが、それ以上に、屈指の魔法使いとしての有名さがある。

「でもさ、カロンだって一から入学し直しなわけだし、そこまで気にする必要ある？」

「気にしないというお前の神経に驚嘆を覚えるよ。周りを見てみるといい」

溜め息をつかれた。ユウはむっとしてカロンに言い返そうとしたが、言われたとおりに周囲を見回すと、多くの視線に気が付く。

「あー……」

意味もなく呟いてみる。言われてようやくわかったのだが、すれ違うほとんどの人たちから視線を向けられていたのだ。無論、制服でない黒衣を纏ったカロンに向けられるものも多いが、少し意識すればユウ自身にも向けられている視線もかなりのものだとわかる。

急に意識したからか、急に恥ずかしさが込み上げてきた。足早に歩くカロンの横にぴったりと並び、俯き加減になる。

「カロンって、普段からこんなに注目されて大丈夫なの？」

視線を実感として得たことにより、いつも平然としているカロンの態度が逆に気になった。

「最初は流石に戸惑いもしたが、いちいち気にするだけ馬鹿らしいと思うようになった」

「じゃあ、あたしもすぐに慣れないとね……」

気合でどうにかなる話ではないだろうが、心構えをするに越したことはない。

だが、それにしても遠い。かなり早いペースで歩いているにも関わらず。目的の建物らしきものは一向に見えてこない。

「教官詰所ってそんなに遠いの？」

「月乃は魔法武技(アルティアム)の教官だからな。敷地の端にある野外演習場の横に詰めている。遠いのも当然だろう」

「ああ……」

入学の案内に同封されていた敷地の地図を思い浮かべ、端の方にそのような施設があることを思い出した。

「でも、魔法武技(アルティアム)って、守備隊に必要な教科じゃないっけ？　なのにそんなに端っこなの？」

魔法学院の生徒は大きく分けて三つの進路がある。

一つ目が市直轄の研究所の研究者。ここが一番の花形と言われている。

二つ目は、学院の教官となる道。地道な職ではあるが、他者に教えなければならない性質上、かなりの知識と経験が必要となるため、実力は研究者よりも上である場合も多いそうだ。

そして、三つ目が守備隊への配属。軍という組織形態を持たないフロイスにおける唯一の武装組織だ。当然、戦争が起これば派兵され、普段も国境の警備や各市街の警邏に当たっている。

「一番派手だからだ」

「派手？」

カロンの答えはユウには理解しづらいものだった。ユウにとって魔法はそもそも華々しい。言ってしまうと、派手なものであると、それをわざわざ派手と言いつつ首を傾げた。

「お前が実際に見た魔法はセシリアのものがほとんどだろうから、派手なのが当然と思っているかも知れないが、実際はもっと地味なものだぞ？　あいつはいちいち派手好きなんだ」

言われて、人生初の魔法経験を思い返してみれば、確かに必要以上に派手だった気がしないでもない。

この一年でカロンが日常で使った魔法はどちらかというところと他の道具でも十分に代用可能な範囲だったため、確かに華やかな印象はなかった。だが、ユウの感想としては、カロンの魔法の使い方というのは物凄く洗練されているように見えた。無駄がない、というのだろうか。

「で、魔法武技(アルティアム)は魔法効果と共にいかに相手を怯ませられるかという心理影響を考慮して見た目が非常に派手になりがちだ。つまり、そんな魔法を研究者志望の生徒が繊細な魔法制御をやっている真横でやったらどうなる？」

「邪魔……だね」

ただでさえ研究職は花形。優先順位としては当然なのかも知れない。

「でも、いちいち移動が面倒だよ、この学院って」

「最初だけだろ、そう思うのは」

素っ気なくカロンは言い、それきり口を閉ざした。

黙々と歩くユウとカロン。カロンは全く気にした素振りも見せないが、相も変わらず新入生のみならず、上級生からも無遠慮な視線を向けられ、ユウは身を小さくした。

そういえば、カロンと出会ったのは去年の六月だったか。ユウはその時のことを思い返した。

法歴一四九二年六月。ユウはグランベルの堅固な城門をくぐった。

ユウは内側から城壁を見上げ、そこに施された魔法陣を凝視するが、知識のない彼女には難解な図形と文字の固まりにしか見えない。それを残念に思いつつ、しかし、希望に満ちた瞳で魔法陣を目に焼き付け、その場を後にした。

ユウの格好は基本的には茶色のマントに革のブーツという、いたって普通の旅装。だが、彼女が背負う荷物は観光旅行には多く、鞆がパンパンに膨らんでいる上、入りきらなかった荷物は紐で括られたりぶら下げられたりしている。中には鍋などの金物もあり、彼女が歩くたびにそれらがぶつかって騒々しい音を立てているせいで衆目を集めている。

ユウは手にした古びた観光地図を見つめる

「こっちでいいはずなんだけど……」

地図の通りに進んでいるはずだが、なにぶん、地図そのものが古い。目じるしが描いてあっても、実際には目じるしが無かったり、あったとしても場所が移っていたりして、簡単には目的地にたどり着くことはできない。苦労してさまようこと一時間強。ようやく地図の目じるしと符合するところにたどり着き、努力が報われたと少女が喜んだのは束の間。

「なによ、これ……」

驚きに瞳が見開かれる。期待していた光景に、ではない。観光地図に描かれていた光景との落差ゆえだ。絵に描かれたような雑多な賑わいはおろか、人っ子一人見当たらない。その上、通りは薄暗く陰っており、雰囲気があるといえば聞こえがいいが、実際は空気が湿っており、路地裏に迷い込んだのではないかと少女に思わせた。

「間違えた……わけじゃないみたいね」

もしかして、と思って視線を向けた先には傾いだ上に半ば腐った木看板がある。そこにはかすれた、しかし、読み取ることが可能な字で『魔法街本通り』と記されていた。

なんの冗談だと、少女は観光地図の絵と通りを見比べてみるが、その落差は埋まるはずもなく、むしろ、現実を突き付けられただけであった。

「移転？」

その可能性はなくもない。なにぶん、彼女の手にした観光地図は古いものであり、記された情報が古いものであるのは言うまでもない。ならば、魔法街自体が移転した可能性も十分にあった。

どうしたものかと思いを巡らせていると、通りに面した扉が軋んだ音を立てながら外側に開かれ、顔から足元までを黒衣で包んだ人物が姿を現した。

旅行者がこのような路地裏のような場所に用があるとは思えないし、現地の人なのだろうが、随分と怪しい風体だ。

彼か彼女かは不明だが、こちらの視線に気が付いたのか緩慢な動きでこちらに顔を向け、そして首を傾げる。

「旅行者らしいが、このような所に何用だ？」

問う声は柔らかくも芯の通った男のものだった。ユウはその人物に若干の警戒心を抱きながらも、

「魔法街って……ここですよ？」

恐る恐る問うが、彼はしばし黙り込み、視線だけがユウの全身を舐めるように見た。それから数秒してからようやくといった感じで、

「ここだった、と言うのが正しいな」

そう告げ、顔を隠していたフードとその下の口布を外す。見えた髪色は薄暗いせいで最初は黒に見えたが、よく観察すると色の濃い紫だということがわかった。瞳は氷雪を思わせる淡青色。切れ長の目と合わせて怜悧な印象を受ける。

「魔法街はすでにこのような廃墟になってしまった訳だが、ここに何か依頼でもしに来たのか？」

「あ、そういうんじゃないくて……」

しかし、初対面の人間にいきなり理由を言うのも憚られ、ユウは俯いて口籠った。

男も急かす訳でもなく、ただ俯いたユウの頭を見ているのがなんとなくわかった。

理由を言うべきか逡巡した。だが、結局動かなければ状況は変わらないのだと考え、顔を上げ

「あの」

「なんだ？」

ユウが声を発すると、即座に男が応じる。ユウは息を吸って心を落ち着けてから、

「あたし、魔法使いになりたいんです。それで魔法街に……」

言葉が尻すぼみになる。

男が近付いてくる。遠目からでもでも整っているとは思っていたが、近付いて、さらに目を覗き込まれてユウは思わず頬を赤くした。

「それは本気か？」

間近での問いユウは言葉ではなく、首を振ることで答える。男はすっと体を離すと、

「なら、私の弟子になってみる気はないか？」

そう、意地の悪そうな笑みを浮かべて彼は言った。ユウは呆然とし、そして、反射的に頷いてしまった。

それが黒衣の魔法使いカロン・F・イルナリスとの出会いだった。

思えば、あの出会いはセシリアという魔法使い、正式には魔導師によって仕組まれていた出会いであった訳だが、ユウは彼の弟子になったことを後悔していない。それどころか、カロンは見ず知らずのユウに対して随分と親切にしてくれたように思う。師匠として魔法の勉強を見てくれたのはもとより、衣食住のすべてを惜しげもなく提供してくれた。生活水準としては、故郷の港町にいた頃よりも格段に上がっているだろう。そのせいで、若干太った気がしないでもないが。

ユウが過去を思い返しながら惰性で歩いていたため、急にカロンが道を外れたのに気が付くのが遅れた。

慌ててその背中を追い、横に並ぶ。道を外れた理由は前を見れば明白で、まだ遠くはあるものの、詰所と思われる建物が見えてきていた。振り返って元いた道を視線で辿ってみると、今歩いている野外演習場の外周に沿って大回りをしているのがわかった。

「さて……」

それから十数分歩き、広大な野外演習場を横切った先にある建物の前でカロンは立ち止った。

「月乃、いるか？」

木製の扉を叩きながらカロンが呼び掛ける。生徒が教官の名前を呼び捨てにするのはいかななものかと思うが、カロンもツキノも気にした様子はないし、何よりも旧知の間柄というのが大きいのだろう。

しばらく音がしなかったが、やがて、木製の床を固い靴底で歩く音が聞こえ、内側に扉が開かれた。顔を覗かせたのは目当ての人物であるツキノではなく、小柄な、ともすれば生徒よりも背の低い童顔の女性が顔を覗かせた。髪色は濃い茶色で、瞳はうぐいす色。

「足音が軽いと思ったらミリアだったのか。ツキノは？」

いささか無遠慮なカロンの物言いが、小柄な女性、ミリア・ハルメン魔法教官は気にした風もなくにっこりと笑い、

「もうすぐ来るわよ。ちょっと準備に手間取ってるだけだと思うから」

「準備？」

「ええ。もしかして、呼ばれた理由聞いてない？」

カロンは無言で頷いた。ミリアは困ったように溜め息をつき、それから踵を返して中に入って行った。

「こら、ツキノ！ いくらカロンくんでもちゃんと理由言わないと迷惑でしょ！」

閉ざされた扉の中からミリアの声が響いてくる。思わずカロンとユウは顔を見合わせ、お互いに首を傾げた。

「私に迷惑が掛かる用事なのか？」

「さあ……あたしに訊かれても」

「それはそうだな」

カロンはそっと溜め息をつき、頭を搔いた。しかし、いくらツキノの親友とは言え、ミリアがここにいるのは珍しい気がする。

それから数分待たされ、ようやくツキノが姿を現した。

「いや、すまない。こちら準備に手間取ってしまってね」

口では誤っているが、表情は物凄く晴れ晴れとしている。高い位置で結った長髪が尻尾のように揺れていた。彼女は東方の半島に位置する桜花皇国の出身で、それを示すように髪と瞳の色は黒。だが、均整のとれた体つきは小柄な人が多い東方人とはかけ離れているように思う。

「で、何の用だ？」

つっけんどんに問うと、ツキノは懐から懐中時計を取り出して時刻を確認し、

「もうすぐ着くころかな。そしたら説明するよ」

そう言って、視線を演習場に向ける。ユウも釣られてそちらに目を向けると、何やら数人の生徒が歩いてくるのが見えた。

「来た来た。じゃあカロン、行こうか」

カロンはツキノに背中を押されるままに歩き出し、その後ろをユウとミリアが続く。

演習場には合計十人の人間がいた。カロン、ユウ、ツキノ、ミリアの四人と後から演習場にやって来た六人の男子生徒。体格が良かったためか、ユウはやや圧倒されていた。

「で、用事っていうのはこいつらか？」

「ねえ、あんたが吹っ掛けてきたんだから、そっちから説明しなさい」

ツキノが男子生徒たちの中心に立っていた一際体格の良い人物に声を掛けると、彼は一歩前に進み出て、

「オレたちは魔法武技(アルティアム)を専門的に習得している同志でな、一つツキノ教官に手合せ願いたいと思ったのだが」

そこで言葉を切ってツキノとカロンを交互に見遣る。

「どうしても手合せしてほしいかったら、弟子を倒してからにしろ、と言われたのだ」

カロンの眉がぴくりと動き、目だけを動かしてツキノを見る。

「何時、私は月乃の弟子になった？」

「いやー、同門の弟弟子なら私の弟子も同然だろ？ だからと思ってな」

「全然違うと思うがな。まあいい」

軽く溜め息をつき、それから男たちを臆することなく見回して、

「要するに、私がお前たちに負けなければツキノの体面は保たれるということか。久しぶりに体を動かすのも吝かではないし、引き受けてもいいが.....ルールはどうする？」

問いかけはツキノと男たちの双方へ。

魔法武技(アルティアム)は簡単に言えば魔法を使った戦闘競技のことだ。

ツキノを交えて数言言い交わすと、男たちとカロンは離れて立つ。

「じゃあ、代表選ということで、そっちの代表がカロンに勝ったら、私が直々に相手してやる。負けの診断は戦闘続行が無意味と私が判断した場合と降参を認めた場合だ。双方、それで構わないな？」

全員が無言で頷いた。ユウはミリアに促がされ、演習場の戦闘区域外に出る。

六人が輪になって代表を誰にするかを話し合っている。その間、カロンは手足をぶらぶらと動

かしたりして、体を解している。

「武器と違って使わないんですか？」

そう問うと、ミリアは首を横に振って、

「普段は使うよ。でも、二人とも格闘主体だから、あんまり武器は使わないかな」

そうこうしている内に、代表が決まったらしく、一人の男が進み出て来た。彼は先ほどカロンに対して今までの事情を説明していた一番体格の良い男だった。残る五人はユウたち同様戦闘区域外に出る。それを確認したツキノはミリアに合図を送り、彼女はそれを受け、

“――風地火水、四属の理を以て境界と為し、如何なる物をも阻み、我等を守護し給え。Grenze”

跪いて、戦闘区域とこちらを区切る線に手を触れると、翠、橙、紅、蒼の四色の光が線上を走り、再び円を描いて戻ってくると、一瞬戦闘区域内の様子が歪んで見えた。

「ツキノ、これで大丈夫よ」

「ありがとう。では、始めようか」

カロンと男は少し距離を置いて向かい合い、ツキノはその二人の間に立って右手を挙げる。

「二人とも、武器はいいのか？」

「……そもそも用意してない」

「いらぬ」

前者がカロンのぼやきで、後者が男の決然とした声。ツキノは肩を竦め、それは悪かったとカロンに言う。

「まあ、なくても負ける気はしない。早速始めよう」

「オレとて負ける気はない。ツキノ教官、合図を」

「やる気は十分と。じゃあ」

ツキノの目がずっと細まり、両者が軽く身構える。

ユウは静寂を感じた。ぴんと張りつめた空気がそう感じさせているのだと気付いた瞬間、ツキノの手が鋭く振り下ろされた。

男が牽制するように一步前が出る。カロンはそれに対して一步後ろへ。両者の距離は差し引きゼロ、目立った動きはない。男の方は視線が目まぐるしく動き、カロンの隙を窺っているようだが、カロンはじっと相手の表情を見据えている。

数瞬の間の後、先に動いたのは男の方だった。いくら窺っても隙を作らないカロンに対し、自ら動くことで戦局を変えようとしたのか。

その巨体に見合わぬ速度で迫り、拳を振り抜く。それはカロンは受けようとはせず、身を回してそれを避け、さらに回転の勢いを利用して踵が男の首筋を刈る。

一瞬、男の体が沈みかけたが、寸でのところで気を持ち直し、大地を力強く踏み締めて体を支えた。

カロンは身軽に後ろへと跳び、距離を取り直す。その間に男も体勢を立て直し、再び構え直す。

今度踏み込んだのはカロンだった。低く、滑るように男へ迫る。全身のバネ使って身を跳ね上げ、掌底が顎を確実に捉えた。地面から足が離れ、巨体が浮いた。そして、鋭く身を回し、さ

らに肘を胴へと叩き込まれた。男の身がくの字に折れ、肺の中の空気が漏れる。

だが、カロンは攻撃の手を止めなかった。右手が空中にまだある男の体に差し伸べられ、掌が胸に置かれる。

“――遍く大気よ、我が手に集いて爆ぜよ。”

魔法陣が瞬時に展開し、その直後に爆発音がして男の体が重さを無視したような勢いで吹き飛ぶ。

数回地面を跳ねてからさらに数メートルを転がって男の体はようやく止まった。いくらなんでもやり過ぎではないだろうか。

そう思ってユウがおろおろしていると、そんな心配は余所に、男は顔をしかめながら立ち上がった。

「どうやら、オレではまともに太刀打ちできないのか。では、玉砕覚悟で行くしかない」

男は着ていた上着を脱ぎ捨てると、全身の筋肉を隆起させた。縄のように盛り上がる筋肉が彼の体を大きく見せる。

“――我が骨肉に滾るは大地の加護。そして、我が四肢に宿すは荒ぶる獣の爪牙。我、大地を駆りて獲物を屠る者。Theriomorphosis!”

足元に展開した魔法陣は浮き上がり、足元から頭の先までを通過していく。魔法陣が通り過ぎた後の体は人のものとは思えない程筋肉が増大し、手足の指先には長大な鉤爪が備わっている。

「獣化か。まさに肉体が武器という訳だ。面白い」

この間に攻撃すれば倒すのも容易いだろうに、カロンは楽しげに声を上げ、構えを解いた。

「なら、私も魔法使いらしく、体術は抜きでやってみようかな」

獣化の完了した男と構えを解いて相手を誘うように両腕を広げたカロンが向かい合う。

普通、この距離なら魔法を使うよりも直接攻撃した方が早いだろう。獣化して獣の性質を得ているなら、さらに速い筈だ。だというのに、カロンは好戦的な笑みを浮かべ、審判役のツキノも楽しそうだ。

「これってどっちが有利？」

横のミリアに問いかけると、彼女は首を傾げ、

「一般的にはポラックくんの方が有利に見えるよね。でも、問題となるのはカロンくんの魔法実行速度かな……でも、わたしはカロンくんを知ってるから。どっちが有利かと言われれば圧倒的にカロンくんだろうね」

「そう、なんだ……」

先生にそうまで言わせるカロンの実力の片鱗は先ほどの連撃から窺えるが、獣化した相手にどこまで通用するものなのだろうか。

咆哮を上げ、鋭い爪を振り上げて襲いかかった男に淡い笑みを見せ、カロンは朗々と、

“――我は狩人。汝は獣。我が弓は汝を討てと欲す。矢は汝の命を欲す。なれば弓に番えし告死の矢は汝の胸に。Schiesen”

それは謳うようで、そして、力に満ちた詠唱。詠唱に導かれた魔法陣は瞬時にその像を結び、即座に効果を発揮する。その工程は鮮やかで、無駄は一切ない。

カロンと獣化した男の間に現れた魔法陣は中心から光の矢を放ち、空中に在った彼を射落とした。

巨体が襲いかかった勢いのまま地面に激突し、地響きを立てる。

「ポラック、大丈夫か？」

すぐさまツキノが駆け寄り、容体を確かめる。気は確かなようで、しっかりと頷きを返している最中、獣化していた肉体が穿たれた個所を中心に元へと戻って行く。

「まさか、単純な魔法力の違いで圧倒されるとは思ってなかった。オレもまだまだということか」

ポラックというらしい男は元の姿に完全に戻り、その口にどこか嬉しげな笑みを浮かべながら立ち上がる。カロンは手を貸す訳ではなかったが、立ち上がった彼に対して手袋をしたままの手を差し出した。

「あの獣化の魔法は悪くない。もう少し耐久力があつたら、さっきの魔法にも耐えられた筈だ」

上から目線ではあったが、ポラックは気にしていないようで、手を強く握り返し、

「さすがに四年前の首席に勝とうなんざ、気の早い話だったようだ」

明るく笑う。どうやら、カロンと知って挑んでいたようだ。

「さて、今回の勝負はここまでということでもいいかな？」

傍観していたツキノが口を挟むと、両者は揃って頷き、それに合わせてか、ミリアは戦闘区域とこちらを区切っていた魔法を解く。

ユウはカロンに駆け寄り、

「正直よくわからなかったけど、なんかすごかった」

思いのままに告げると、カロンは呆れたように眉をあげ、

「お前もあのくらいの芸当は出来るようになって欲しいものだな」

「そ、それは……」

「冗談だ」

彼はユウの頭を乱暴に撫でる。ユウはされるがままにしていたが、あまりに髪が乱れるため、身をよじって逃れる。

「じゃあ、用は済んだ訳だし、私は帰らせて貰う」

服の埃を軽く払いながら言うカロンに対し、ミリアが、

「せっかくここまで来たんだし、お茶でも飲んでいかない？ もちろん、ポラックくんたちも」

「オレらもですか？ まあ、誘われたんだし、相伴にあずかります」

カロンくんは？ という風に視線で問われた彼は頭を掻き、

「わかった。用事もない筈だし、付き合おう」

一行は連れ立って教官詰所に入り、一階の応接室に通された。魔法武技(アルティアム)の同志たちはひとかたまりになり、先ほどの戦いについて論じ始め、カロンはソファに足を組んで座る。ユウはどうしたものかと迷ったが、結局カロンの横に腰掛けることにした。

「お疲れさま……って、疲れたのかしらないけど」

正直な話、全く疲れているように見えない。カロンは小さく笑みを浮かべ、

「多少は疲れるさ。ただ魔法を使うだけならまだしも、相手との駆け引きが必要なのが戦いだ。ユウは今日の試合を見てどう思った？」

「どうって言われても……結構短い試合だったのかな、とは思うけど。駆け引きとかそういう技術的な所はちょっとわからないな」

軽く思い返してみても、最初ポラックが一撃を加えようとしたが、結局カロンの反撃になすすべもなかったようにしか見えない。最後にポラックが獣化したところをカロンが魔法で撃ち抜いて終わった訳だ。試合としては見どころの少ないものではないだろうか。

「まあ、初めて見たらそんなもんかね」

ポラックが輪から抜け出してきて、ユウの向かいに立った。体が大きいせいで少し圧迫感がある。

「力の差がありすぎて、ほとんど勝負にならなかったが、試合の基本は押さえてたと思うぜ。お互い力を見極めてから決め技を一発」

言われてユウはなるほど、と思った。手の内のすべてはわからないにしろ、どの程度『やれるか』は軽く手を合わせればわかる。そうすれば、打つべき手は大体決まる。

「それで打った手が獣化？」

「あれが最善手とはいえないけどな。だが、あの場で勝負に出るとしたら、得意な技にした方が勝率は上がると思ったが、結局、根本的なところで勝てなかったようだ」

笑みは苦いが、後腐れの類はなさそうで、こういう競技者は結構さっぱりとした性格をしているのかもしれない。

「茶が入ったぞ」

ツキノがお盆に器を載せて危うげなく歩いてくる。このあたり、流石に武技を教えているだけはある。

供されたのは薄緑色の湯気を立ち上らせる液体。カロンはその正体を確かめることもなく器を手に取り、啜った。

「ふう……」

ユウがその様子をまじまじと見ていると、カロンは胡乱そうにユウの顔を見て、

「熱いうちに飲まないともったいないぞ」

「あ、うん……」

促され、ユウは未知の液体に口を付けた。鼻に香るのは紅茶のような華やかさはないが、心を落ち着かせる芳香。口に含んだ液体は苦みの中にわずかな甘みを内包していて、未知の味わいではあったが、なぜだかほっとした。

「ユウ、お前もしかして緑茶は初めてだったか？」

給仕を終えたツキノはユウの隣に腰掛け、自分の分のお茶を啜った。

「うん、はじめてだよ」

「そうか。なにも考えずに出してしまったな」

「大丈夫。はじめてだからなんだろうとは思ったけど、美味しいし」

「ならよかった。ところでカロン」

ユウを挟んでツキノがカロンの話しかけた。彼は一口お茶を飲んでから、ツキノの顔を見返し、続きを促す。

「お前、さっきの魔法かなり手加減しただろう」

「とんだ誤解だな。これのせいで力が出せないんだよ」

カロンの両腕をつなぐ鎖を鳴らして見せる。彼自身があまりに普通にしているために気にしないが、両腕には常に鎖がある。

「復学の条件、だったか？」

「私は復学させてくれなど、一言も言ってないのだがな……」

「それだけ惜しい人材、ということです。議長に期待されているんですから、がんばってくださいね」

そう、その鎖はカロンの復学するにあたって、グランベル市議会議長、ディーノ・グランベルがカロンの渡したものだ。無論、彼の言う通り、彼自身は積極的には復学しようとは考えてなかった。

「しかし、鎖とはな。まるで犯罪者だ」

ツキノがからかうように言うと、カロンは皮肉気な顔になり、

「あながち間違っていない辺り、笑えないぞ？」

「そう拗ねるな」

「私が拗ねるような人間か？」

「そうだったら可愛げがあっただろうな……」

しみじみと呟くツキノにカロンは呆れの表情を浮かべる。ポラックは苦笑するだけで、流石に言葉は挟めないらしい。

「では、オレたちはそろそろ帰ります。今日はお手間を取らせました」

「別にいいさ。実際に戦ったのはカロンだしな。礼ならこいつに言っとけよ」

ツキノの言葉にポラックはカロンへと向き直り、軽く頭を下げて、

「いつかまた手合せ願うと思う。その時はよろしく頼む」

「ま、そのうちな。私も学院に来たからにはやることをやらなければならないしな」

「ああ、おいおいでいい。では、今日はこれで」

ポラックたちは各々ツキノとミリアに挨拶をしてから詰所を出て行った。

少し静かになった詰所。他には人がいないようで、ユウたちがお茶を飲む音以外、時折外から鳥の音が聞こえてくるくらいだ。

「さて、本題に入ろうか」

唐突に、ツキノがにっこり笑ってそう言った。何を突然、と思ってユウが彼女の顔をまじまじと見る。

「ん？ なんだ、ユウ？」

実に楽しそうに笑う人だ。

「いえ、あれで用は終わりなのかと思ってたから」

「そうではなかったらしいな」

完全に諦めた口調でカロンが同意すると、ツキノは不本意そうに、

「何を言う。お前が頼んできた要件だろう？」

その言葉にカロンは軽く目をみはり、

「もう準備出来たというのか？ まだまだかかると思っていたが……」

「私を舐めるなよ？ 可愛い教え子のためなら、努力は惜しまんさ」

「なんの話？」

どうやら、カロンがツキノに頼みごとをしていたらしいのはわかるが、内容はさっぱりだ。

「聞くよりも現物を見た方が早いわ。ちなみに、今朝出るのが遅れたのはこれがあったからよ」

そう言って、彼女は一度立ち上がってからどこかに行ってしまう。

ミリアも要件はわかってないのか、

「ツキノになにをお願いしたの？」

「見てからのお楽しみ、ということで」

少し意地悪く言うカロンにミリアは頬を膨らませて見せる。

「可愛いが、あんまりそういう表情外ではしない方がいい」

「う……そ、そう？」

しっかりと頷くカロンに、ユウも首肯することで同調した。ミリアは項垂れ、それから焼き菓子に手を伸ばす。

「それ以上は成長しないんだから、横に大きくなるぞ」

戻ってきたツキノがからかうように言うと、ミリアの手がびたりと止まる。

「みんなのイジワル……」

口をとがらせて拗ねて見せるミリアのことを素直に可愛いと思ってしまうユウだった。年齢的にも立場的にもミリアの方が上の筈ではあるが。

再び椅子に腰掛けたツキノが手に小さめの箱を持っているのにユウは気が付いた。

「今朝届いたばかりでな、私も現物を確かめてないから少々不安は残るが――」

施錠してあった古びた箱に鍵を差し込み、開錠する。見た目の割に重い音を立てて鍵が外れ、蓋が少し浮く。その隙間から、わずかだが光が漏れていた。脈を打つように緩やかに明滅する光

。ユウは思わずその光に手を伸ばしていた。

ツキノ蓋を開くと、そこには硬貨大の透明な結晶の中に四色の光が浮かぶ不思議な石があった。

「これは……？」

手を伸ばしたものの、なんだか怖くなって引っ込めてしまった。振り向いてカロンに問うと、  
「天然の精霊石だ。お前の媒介用にとあってな」

「精霊、石って……ええっ!？」

思わず体ごと振り返り、カロンに詰め寄ってしまった。カロンの言っていることは理解出来る。だが、普通媒介は学院の入学時に適正に合わせて配布されるものがほとんどだ。だが、カロンはそれに先駆け、精霊石を媒介としてユウに渡すと言っているのだ。

しかも、精霊石というのは、まさしくフロイスの信仰対象である精霊にまつわるもの。当然、希少性は高い。どんなに低位の精霊石でも人が半年は食べることが出来る程の値段で取引される。

「そんなに驚くことか？ 私の媒介もそうだぞ」

そう言って、手袋を外して、右手の中指に填まっている指輪の石を見せる。それは常に色が変わる不思議なもので、見ていると吸い込まれそうになる。

「神煌幻珠。等級で言えばまさしく第一等級。そして、そこにある四煌宝珠は第二等級だ。少しは喜んこんだらどうだ？」

揶揄するように言われ、しかしユウは、

「だいに、と……きゅ」

驚きすぎて何を考えていいのかわからない。

媒介は十の等級に割り振られる。厳密には等級の中でもさらに細かな区分けがある。通常、学院で配布されるのは第九か第八等級。

余程成績がよくて将来を期待されたとしても、第七等級がもらえるかどうか。そして、金に任せて高位の媒介を手に入れたような貴族でもせいぜい第四等級ぐらいが関の山。それは金銭面の問題ではなく、才能の問題。いくら金を積もうとも、使えない媒介は無用の長物ということだ。すなわち、上位三等級は扱える人の存在そのものが幻と言われるほどの媒介だ。

ユウは心を落ち着かせようと、緑茶を呷って、しばらく顔を手で覆って俯いた。

「なあ、月乃。そんなに驚くようなことか？」

「お前の価値観のズレは相変わらずだな。普通の魔法使いなら第三等級だと聞いただけで失神する程だろう？」

「そうねえ……ユウちゃんはまだ魔法使いではないけど、媒介、それも精霊石の価値だけは一般人でも常識だものね」

三人の会話を右から左に聞き流し、しばらく頭の中を空っぽにした。

数分経った頃だろうか、ようやく落ち着いてきたので、もう一度冷めかけた緑茶を口に含んで潤してから、

「わかった。これが第二等級なのはわかったよ。でも、これは受け取れない」

カロンの目をしっかりと見据えながらそう告げると、彼は肩を竦め、ツキノに視線を遣る。それを受けてツキノが頷き、ユウの顔を無理やりツキノの方へと向ける。

「ちょっとこっち向きなさい」

「もう向いてる。というか、それ以上捻ると首が……」

首が変なことにならないうちに体ごと彼女の方を向いた方が良さそうだ。慌ててツキノに向き直ると、彼女はじっとユウの目を覗き込んで、

「実はこの精霊石ってもともとカロンのものなのよ。でも、カロンはすでに第一等級のを持っていたから、条件付きで人に貸してたのよ。それを今朝がた返してもらった訳。で、それを貴女に託したいって言うてるの」

彼女はそこで言葉を切り、

「そもそも、この精霊石はとある理由で精霊からカロンに渡されたものなの。渡された理由はただ一つ。この石に相応しい人物にこれを渡すため。わかった？ カロンは貴女がこれに相応しいを思ってる」

「精霊……から？」

「ええ、四年ほど前にね」

ユウは視線を箱に収まったままの精霊石に向けた。四色の光に心が吸い込まれそうだ。

「じつを言うと、その光は媒介の共鳴光だ。つまり、この場にそれに相応しい人物がいるということだ。ちなみに、私は共鳴光は出なかった」

ツキノが言ったことを鵜呑みにすれば、これはユウのためにあるということだ。

「さらに言えば、私にも反応しなかった。ミリアは知らないがな」

「多分、わたしも違うよ。共鳴は媒介側だけの反応じゃないもの」

ユウは唾を飲み込もうとして、口の中が乾いていることに気が付いた。

震える指で光を明滅させ続ける精霊石に手を伸ばし、そして、触れた。

自分の中で何かが弾ける感覚があった。そして、世界の見え方が急速に変化していった。今まで見えなかったものが見える。それは、淡く色づいた靄のようなもので、部屋のあちこちを漂っている。そして、靄よりも濃密なものがツキノやミリアの体を薄く覆っている。カロンはと目を向けると、靄のようなレベルではなく、もっとはっきりした形をしたものが彼の背中にあった。

「翼……？」

「見えたか」

カロンが困ったように笑い、それから、ユウの触れてる精霊石に手を伸ばし、

“——気高き龍の魂よ。彼の者を使い手と任じるならば、其の力を与えよ”

そう唱えると、精霊石から何かが流れ込んできて、ユウの全身を駆け巡った。それは熱く全身を満たして、それから潮が引くように感覚が薄くなっていく。だが、完全にはなくならず、全身に何かがあるのがはっきりと感じられる。

「大丈夫か、ユウ？」

「へ？ あ、うん」

未知の感覚にぼうっとしてしまい、カロンに声を掛けられて意識がはっきりとした。

「おめでとう、ユウ。これでお前も魔法使いの仲間入りだな」

「おめでとう」

ツキノに抱き締められ、ユウは曖昧に頷いた。おそらく、今全身を満たしているのが魔法の力。

ツキノの肩越しに見える世界はそう大きく変わった訳ではないが、少し意識すれば、さっきと同じように薄く靄のようなものが見える。

「ああ、魔素を視ているのか。どうだ、世界の見え方は？」

「不思議。今まで何もないとしか感じなかったのに、今は世界に存在が満ちているを感じる」

「魔法というのは存在に対して働き掛ける力だ。使い方を誤れば世界が揺らぐ。そのことを覚えておけ。だが、お前に世界を思う気持ちがあるなら、そんな心配は要らないがな」

カロンの忠告を胸に刻んで、ユウはツキノの抱擁から逃れた。

ユウはカロンの方に向き直り、頭を下げた。

「こんなにすごいものをありがとう。大切にするから」

「私は約束を果たしただけだ。だが、絶対になくすなよ。そのためにこれに入れておけ」

そう言って差し出されたのは、撫子の彫金がなされたペンダント。ヘッドの部分は蓋が開くようになっており、中に宝石を固定できるように爪が付いている。

「これとその精霊石があれば、それだけでかなりの加護になる。肌身離さず持っておけ」

「これは？」

すごく用意がいい。ペンダントの出所を訊くと、ツキノが後ろから抱きついて来て、耳元で囁く。

「カロンのお手製だ」

「へっ……」

間の抜けた声が漏れた。器用な人間だとは思ったが、ここまで出来るとは思わなかった。

ユウはペンダントを胸に抱き、カロンの顔を見ないまま、

「ありがとう」

と、それだけを言う。

「ああ。これでお前も晴れて魔法使いの仲間入りだな。これから魔術師、そして魔導師になれるかはお前の研鑽次第だ。頑張れよ」

頭を撫でられてユウは余計に彼の顔を見れなくなってしまった。

カロンはまだツキノ達と話していくと言ったので、ユウは一人来た道に戻る。まだ時間は十分にあったので、友人を探そうと心当たりの場所を見て回った。しかし、結局見つからず、寮として割り振られた一軒家に戻ることにした。

この一軒家は通常の寮とは別に学院側が用意したもので、どちらかという、ユウではなくカロンのためのものだ。というのも、議長がカロンの入学に便宜を図ったためであり、この寮もその一環なのだ。ただ、部屋が余っているため、ユウとカロンの友人であるリックと一緒に住むことにしたのだ。

「ただいま～。誰かいる？」

寮に帰って声を掛けると、

「あら。ユウちゃん。どこに行っちゃったんですか？」

思わぬところで探し人の声を聞くことになった。

「カエデっ！ そっちこそどうしてここに？ 探してたのに」

「あら、ごめんなさい。リックさんに誘われたもので」

「あ、そうだったんだ」

理由がわかれば単純で、道理で探しても見つからない訳だ。

ということは、リックは当然いて然るべきなのだが、声を聞かない。

「リック？」

不審に思って彼の名を呼ぶと、奥から物凄い音が響いて来て、

「ちょ、待って。今行く！ 痛えー」

何やら慌てた感じのある彼の声が聞こえた。ユウは首を傾げ、騒音のした方に足を向ける。居間からはカエデがカップ片手に出て来て、ユウの顔を見てから首を傾げ、

「いかがなされたんでしょうね？」

「さあ、でも助けに行った方がよさそうだよね」

「そうですね」

カエデは一度カップを置きに居間に戻り、それから長い包みを持って戻ってきた。

カエデ――蘆野楓はフロイス連邦の遙か東方の半島に位置する国、桜花皇国の出で、ある筋では有名な家計の血筋らしい。そうカロンから聞かされた。彼女自身は自らの出生についてはなにも語らないので、ユウも深くは訊こうとは思わない。別に知らなければ友達でないなんてことはないのだから。

彼女の容姿はひと言でいうなら可憐だ。背中半ばまでの波打つ栗色の髪と東方人特有の漆黒の瞳。いつも優しい微笑みを浮かべているさまは同性から見ても可愛いと思ってしまう。ただ、ユウとして羨ましいのは胸の大きさ。ユウも決して小さいわけではないが、彼女と比べるとどうしても見劣りしてしまう。何かしらの動作をするたびに揺れる胸とはいかがなものだろうか。

思わず胸を注視していたユウの視線に気が付き、頬を染めて隠そうとする。その姿は思わず抱きしめたくなるぐらい可愛いが、ユウはその考えを自制し、リックがいるだろう工房にカエデを

促して歩き出す。

ユウが工房の扉を恐る恐る開くと、中は大量の荷物が雪崩を起こし、リックはそれに巻き込まれたらしい。この大量の荷物はカロンたちがもともと住んでいた旧魔法街の店にあったものを昨日運び込んだもので、片づけが出来て居なかったものだ。

「大丈夫？」

「ああ、生きてるし大丈夫だろ」

そう言いながら彼は体の上に乗っていた工具の類を払い落とし、その身を起こす。

「あんまり重いものじゃなくてよかったね？ いくらなんでも死体の発見者にはなりたくないし」

「まあ、な……でも、これだけ量があると結構痛いんだぜ？」

手にした小さめの工具を投げて寄こしてくるのをユウは両手で受け止めた。それは見た目よりもずっしりしていて、確かにこれが大量に降りかかってきたら痛いに決まってる。

「で、リックは誘った客人を放り出して、ここでなにしてたの？」

カエデの話を思い返して問うと、彼は困ったように焦げ茶色の髪を掻き、

「ちょっと渡すものがあつただけどよ、まだ整理してないから見付かんねえんだよ」

そういうことか。リックは無精髭の生えた顎に手を当て、積まれた数々の箱を見回す。

「手伝おうか？」

「あー……そうしてくれるのは嬉しいがさっきみたいに崩れるとあぶねえからいいよ。二人は居間でお茶でも飲んでてくれ」

「一人で見つけたりそうなの？」

問うと、リックは腕を組んで、さらに首を傾げ、

「……無理かもな」

「でしょ。だったら手伝うから。なにを探してるの？」

ユウは制服の袖を捲る。リックは手振りを交えながら、

「こんくらいの銀色の球体がいっぱい入った箱なんだけどな。どんな箱に入れたのか覚えてねえんだよ」

「わかった。とりあえず、あたしは手当たり次第開けてくから」

「おう」

二人がかりで捜索を続けるが、箱の数が多すぎて作業が思うように進まない。いや、進んではいるのだが、肝心のものが見つからない、というべきか。

カエデも見ているだけでは手持無沙汰だったのか、捜索に加わり、それからおよそ十分後、カエデが大量の荷物の中から探し当てた。

「いや、助かった。一人だったら夕方までかかってたかもな」

「なのにカエデちゃんを呼んだわけ？」

ユウがジト目で見ると、リックは怯んだようになり、それからしゅんと肩を落とす。

「すみませんでした」

カエデに向けて謝ると、彼女は大げさなぐらい首を横に振って、

「いえ、めっそもない。顔をあげてください。わたしのためにしてくれていたんですから、謝ることなんてないですよ」

胸が揺れてるな、とユウは思ったが、それは口に出さず、

「で、それってなに？」

木箱に大量に詰められた銀色の球体を指差すと、リックはそれを箱ごと抱え上げ、

「説明するよりも見てもらった方が早い」

なんだかカロンみたいだな、とは思ったが、先に工房を出て行くリックの後に黙って付いて行く。

「なんでしょうね。少し楽しみです」

カエデは未知のものへの興味が止められないのか、にこにこしている。ユウもつられて笑う。確かにあの銀色の球体はなんなのか、気にならないと言えば嘘になる。

居間に戻った後、リックはお茶の用意をしてからユウとカエデの座っているのの反対側のソファに腰掛ける。

「で、それはなに？」

ユウが口火を切ると、リックは少し笑ってから、

「こいつは魔法具の一種でな。まあ、もちろんカロンが造ったやつだが」

一つを手にとって、表面をすっと撫でて見せると、銀色の球体が『解け』、小さめの楯へと姿を変えた。

「それは――」

カエデが驚きの声を漏らす。ユウは声を上げる事すら忘れてリックの手元を見入っていた。

「こいつは陽炎の楯。認識障害を起こし、相手に狙いを付けさせない防具だな。しかし、一目見ただけでこいつのことがわかるなんて、やはり嬢ちゃんはその血筋のもんってわけか」

「ええ、まあそれは否定しませんが。しかし、それは本物ではありませんね？ 時の経過が感じられませんから」

「ハハ、そこまでわかるか。こいつは驚いた」

にやりと笑い、リックはカエデへ楯を投げて寄こした。その途中、楯は元の球体へと戻り、カエデの手にしっかりと受け止められた。

「封印の解除が維持されるのは解呪者が魔素を流し込んでいる間だけ。供給を断てば球体に戻る」

「なるほど。持ち運びには便利そうですね。しかし、これをわたしに？」

「正確にはそれじゃないがな。えーっと……これ、かな？」

箱を漁り、もう一つの球体を取り出すと、それを再びカエデに投げて寄こす。彼女はそれを危うげなく受け取り、しげしげと眺めてから、

「これは？」

「さあ、なんだろうな？ とりあえず、解呪してみるといいさ。でも、人から離れてな」

言われた通りに離れ、左手に握った球体へ指を滑らせる。

すると、先ほどと同じように球体が解け、そして、

「刀、ですか……しかもこれは」

彼女の言う通り、それは『刀』と呼ばれる桜花独特の武器である細身の湾曲刀だった。

「そう、《蛟》だ。無論、機能を似せた偽物だがな」

答えたのは戻って来たカロン。カエデは彼の登場そのものには驚いた様子はなかったが、言葉には興味を惹かれたらしい。

「さきほどの楯もそうでしたが、なぜわざわざ偽物を？」

「ただの暇つぶし、って言って信じるか？」

「ある程度は。しかし、これらのものは暇つぶし程度で造れるものとは到底思えませんが」

「さて、それはどうかな？」

意地悪くカロンは笑い、

「それはやる。好きに使うといい」

「……では、これはありがたくちょうだいします」

カエデは魔素を注ぐのをやめ、刀が球体に戻る。

カロンは入口から歩いて来て、リックの隣に腰掛ける。その彼へ向け、カエデは、

「学園に戻って来たということは、また魔法具の研究を再開されるのですか？」

「まあ、それが議長の命だしな。とはいうものの、何を作ろうか悩みどころではあるが」

苦い顔で球体を弄ぶカロン。その表情をしばらく見つめてからカエデは切り出した。

「では、わたしからの依頼を受けていただけますか？」

「依頼、ね。それにわたしたちということは、フォルの依頼でもあるということか」

「ええ。手が空いているなら、でかまわないとフォルさんは言ってました。ですので、お暇なときにフォルさんの工房に来ていただければ、と思います」

「この場で訊くことは出来ないのか？」

カロンの訝しがる声に、カエデは苦笑を漏らし、

「実を言うと、わたしもよくは聞かされていないんですよ」

「それでもわたしたち、と言ったのか？ それは矛盾してないか？」

「わたしのためのものだ、とフォルさんはおっしゃっていたので、間接的にはわたしの依頼でもあると思います」

「なるほどね」

得心した、と呟き、リックの分のお茶に手を付けた。リックは彼に半目を向けたが、ため息をついて、お茶を用意しに立ち上がる。

「では、授業が始まるまでには一度フォルの工房を訪ねてみよう。それでいいだろ？」

「ええ。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げ、それからカロンににっこりと笑いかける。しかし、彼は眉一つ動かさず、鷹揚に頷いたのみだった。

それから後は特に医らの話にも触れることなく、リックが作りおいた焼き菓子に舌鼓を打ち、雑談に花を咲かせただけだった。

カエデが寮に戻る帰り際、カロンは思い出したように腰の物入れを漁って、一つの包みを手渡

した。

「入学祝、ってところだ。ユウにもあげたから、一応な」

こういうところが妙に公平だ。それが顔に出てたのか、カロンは呆れを見せ、

「お前にはもうあげただろ？ これ以上何かが欲しいなら、それなりの成果を見せてからにしろ」

「そういうんじゃないかって……ああ、もういいよ。なんでもないから」

「？」

カロンは疑問符を浮かべていたが、突っ込んでも仕方ないと判断したのか、肩を竦めて追求はしてこなかった。その横でカエデは困ったような顔をしていたが。

「じゃあ、また今度ね。見かけたら絶対に声かけてね」

「ええ、また今度。はい、お見かけしたら、ぜひ」

互いに挨拶を交わし、カエデは初春の未だ暮れの早い、夕空の下を歩き出す。

ユウはそれを手を振って見送り、カエデはそれに応えるために何度も振り返って手を振り返してくれた。

姿が見えなくなるころには、すっかり闇の帳が辺りを包んでいて、ユウはカロンに促がされて中へと入る。

今日も一日、とても充実していたと、そう素直に思う。カロンに出会ってからの毎日は、何かしらの刺激がある。だから、感謝の気持ちを込めて、彼の背中を軽く叩いた。

カロンは先日のカエデの言葉に従い、学園の外にあるフォルの工房を訪れていた。

最初こそ警戒心を持って相對していたものだが、とある理由からいたく親近感の湧いた人物だ。

彼の工房はグランベル市の北側に位置する。そこには彼のだけでなく、多数の工房が存在している。それらの多くは宝飾品や織物を作成する工房だが、市場にほど近い位置には、食品の加工場もある。

カロンは市街を北へと向かいながら、道行く人々の視線を集めていることを自覚していた。黒尽くめの服装も無論目を引くだろうが、それ以上に注目されるのは両の腕を結ぶ鈍色の鎖の存在だろう。

カロンだって、街中を両腕を鎖でつながれた人物が闊歩していたら、間違いなく注目する。だが、今その状態にあるのはカロン自身であり、それ故に衆目を集めているのもカロンであった。

だがまあ、以前ユウに言った通り、気にするだけ無駄なのだ。だから、平静を装い、カロンは足早に目的地を目指した。

工房街に辿り着き、カロンは目を細めて建物を見回す。ここは一種独特な場所だ。通常の家より大きな建物が多いが、それらはその工房が作成する物品を加工するのに必要な道具を収めるために必要なものを内包するが故にだ。そして、臭いがまるで違う。

まだ獣臭さの抜けていない毛皮や、強い匂いを発する木材、そして、金属やその他物質が焼ける鼻を衝く臭いが混然一体となって、辺りを漂っている。

カロンはこの臭いが好きだった。別に、悪臭が好きなのではなく、この無秩序な、しかし、何かを作り上げるがために発されるこの臭いに愛着がある、と言うのが正しいか。かつては、ここと似た様な、しかし、もっと濃密な臭いを持つ場所があった。そこはとある政策によって取り潰しになり、今は閉鎖的な政府直轄の組織として稼働している。

そう、そこは『魔法街』。三百年も前に勃発した世界規模の大戦時に隆盛を誇ったグランベルの魔法技術の中樞。他国に類を見ぬ、優れた魔法使いが集い、日夜研鑽に励んだその場所は、今や犯罪の温床となるという理由で解体されてしまった。

そのことに一抹の寂しさを感じる。だが、それも一つの時代の流れなのだと、自身は思っていたが、彼女はそう思っていなかったようだ。

カロンは苦笑を零し、脳裏に浮かんだ人影を払い、目的の工房へと足を向けた。

そこはやや奥まった場所にあり、店舗を備える工房としては立地が悪いと言える。だが、その工房主はそんなことを気にもしていないようで、扉を開いたカロンに対して、

「やあやあ、待って居りましたよ。今か今かと思ひ、一日千秋の思いでしたとも。ええ、はい」

相も変わらず長い台詞を投げかける。カロンはややうんざりしながらも、彼の待つカウンターへと近付く。

「桜花の言い回しで言われても、いまいちぴんと来ないんだがな」

フォルの容姿はひと言でいえば細身。だが、痩せているという言い方は正しくない。例えるなら、山野を駆け巡る獣の細さ、とでも言えばいいのか。決して不健康な訳ではなく、贅肉が極端にないがために細く見えるのだ。

工房での仕事には筋力が必要な場合が多いので、その分しっかりと鍛えられているし、彼は自身で素材を取りに各地を巡ることも多いそうなので、その影響も多分にあるのだろう。

「元気そうだな、その口調の変わらなさを聞くと」

「ええ、息災ですとも。日夜稽古を欠かさず、また、趣味に生きる私が病に倒れる理由などないに等しいでしょう？」

「確かに」

狐目をさらに細めて笑うフォルに、カロンは苦笑を返すしかない。

さて、とカロンは前置き、

「で、楓の言い分だと、お前が私に何かを依頼したいようだが？」

世間話に興じるのも一興だったが、フォルの表情を見ると、何故かうずうずしていたから、早く本題に入りたいのだろうと察しカロンは依頼の件を切り出した。

狐に稲荷、とは桜花の言い回しだが、まさに狐のようなこの男はすぐさまこの話題に食らいついてきた。

「ええ、そうですそうです。貴方様にお頼みしたい事が御座いまして。こちらに」

急かすように促され、カロンは黙って彼に従った。

カウンターの向こう、木製の珠を糸でいくつも繋げ、それらを連ねた御簾のようなものの奥は、すでに工房の一角らしく、木くずや加工しかけの木材が無造作に置かれていた。

フォルは壁の一面に付けるように設えた大机に近寄り、その上に載せられた紙を示して見せた。

カロンは近寄り、その紙に目を通す。ひと言で言えば、設計図だが、

「……こんな物作って何がしたいんだ、お前は？」

読み込むに連れて、その目指すものの概要が見て取れたカロンは呆れをフォルへと向ける。

フォルはくすんだ金の髪を掻き、

「そんなに変ですかね？　むしろ、私としてはこういう物はあって然るべきだと思うのですが……」

「戦争をしている訳でもあるまいし、要らないとは思いますがね」

「でも、魔物は危険でしょう？　そういう意味では持っていてもいいのでは、と。お受け出来ませんかね？」

表情を曇らすフォルには目を向けず、カロンはさらに設計図を読む。

カロンの中ではすでに幾つかの思考が回り始めており、その思考をまとめるために一つフォルに問う。

「何処まで斬ればいいのか？」

「っ！　では、受けて頂けるのですか？」

「質問の答えは？」

フォルの問いには答えずに、こちらの質問に対する回答を催促すると、フォルは眉根を寄せ、「出来れば、ですが魔素構造体を斬れるのが理想です。そうでなければ、通じない魔物の類が居りますから」

「……………」

魔素構造体を切断できる剣。フォルが求めたのはそういう物だ。しかし、これを実現するには障害がある。

理論もそうだが、それ以上に、

「精霊廟にどう言い訳する？」

「それは……………」

「確かに、前文明ではこういった武器も平然と存在していただろうが……今は精霊廟が全てを取り仕切る世界だぞ」

「わかっています。しかし、それでも必要だと」

埒が明かない。技術的な問題はいくつか試行を重ねれば解決する自信はある。だが、魔物のみならず、精霊を斬ることが出来る剣の創造を精霊廟が許すとは思えない。

だが、眉間に深い皺を寄せているフォルにはそれなりの事情があることが感じられる。

「カロン殿、実は――なのですよ」

普段の軽薄ともいえる態度は鳴りを潜め、フォルは重い声で一つのこと告げた。

告げられた内容にカロンは言葉を返すことを忘れた。じっとフォルの顔を見つめ、真偽を確かめようとして、しかし、その表情の揺るぎなさから真実を悟る。

「では、これは……………」

「はい、魔物などただの方便です。実際はいざという時のための切り札として」

カロンは内心で唸った。フォルの言う剣を作れば、それは精霊廟に対する背信行為だ。例え、それが自衛のためだとしても、だ。

だが、カロンとてだてに魔法界で生きている訳ではない。そういう噂があるのはリックを通じて常々聞かされていたが、フォルが言う程に深刻な事態になっているとは思わなかった。

「……………わかった。作ろう」

カロンは葛藤を振り切り、ゆっくりと承諾の言葉を口にした。

フォルは最初驚いていた顔をしていたが、やがてその表情に安堵が滲み、

「ええ、ええ、それは大変嬉しいことです。では、どうか私たちのために一つお願いします。代金は言い値で構いませんので、どうぞ遠慮なく仰って下さい」

緊張の反動か、急に普段の饒舌さに戻ったフォルにカロンは笑い掛け、

「いや、この件は正式な依頼には出来そうもない。だから代金は頂けない。だが、その代わりと言ってはなんだが……………」

カロンは一旦言葉を切り、フォルの表情を窺ってから、

「少々楓を借りてもいいだろうか？」

そう切り出すと、フォルは一瞬の戸惑いの後、急に笑い出した。

「ははは、貴方様という者が！ まったく、深刻な顔で何を言い出すかと思いましたら……………」

ひとしきり笑ってから、フォルは目尻に浮かんだ涙を指先で拭い、未だ笑みの残る顔で、「ええ、はい。その件に関しては大丈夫でしょう。楓も貴方様に対しては心を開いている。恐らく、本人としても問題ないでしょう」

「そうか」

未だに笑いの余韻に浸っているフォルに半目を向ける。

「まあ、どういう用向きで借りるかは問わぬのが華で御座いましょうかね。ええ、私もそんな野暮はしませんとも」

「酷い誤解があるようだが、ここで追及すると、私が負ける気がする」

しかし、フォルの表情はころころとよく変わるものだ。感受性豊かなのだろうが、一時は演技なのではないかと疑ったこともあったが、どうやら素らしいことがわかって以来、諦めにも似た心境になったものだ。

「では、今晚にでも作業に取り掛かるが、受け渡しは？」

「そう、ですね……どうせ楓の手に渡ることになりますし、貴方様から楓に渡してやって頂けますか？」

「まあ、そういうことなら」

それから少し細かいやり取りを交わし、カロンは工房を後にしようとする。

すると、フォルが、工房の奥から小さな包みを持って来て、カロンに手渡した。

「ちょっとしたお土産です。工房に入ってまで、手ぶらと言うのも少し怪しく見えるかも知れないので」

「念には念を、か」

受け取った包みを腰の物入れ入れようとして、しかし入らないことに気が付く。仕方なく、手に持って帰ることにして、

「では、今日は帰らせてもらう」

「ええ、では、よろしくお願いしますね。それと、楓にも元気でやれ、と伝えて頂ければ幸いです」

フォルに建物の外まで見送ってもらい、カロンは学園への帰途につく。

学園の工房兼住居に戻ると、リックが夕食の準備をしていた。

「学園の仕事の方はいいのか？」

「オレの場合、名目上って感じだからな。新学期入っても、仕事があるのか怪しいぐらいだぜ？」

「暇だったら、月乃のところでも行けば仕事貰えるだろ」

「おいおい。あいつにこき使われろってか？」

「それもいいんじゃないか？」

適当に返すと、リックは本気で嫌そうな顔をしていた。

「何でそんなに嫌そうなんだ？ 十分に美人の範疇だろうに」

「いや、だからこそ、というべきだ。なんせ、あいつはオレに下着を含めた洗濯物を押し付けてきたことがある」

「ああ、それでむらむらしてしまつたと。それで顔を合わせ辛いという訳か……」

「おい、勝手に変な納得すんなよ！」

リックをからかって遊んでいると、ユウがタオルで髪の毛を拭きながら今にやって来た。

「リックが騒がしいみたいだけど、どうかしたの？」

「ああ、リックが月乃の下着に欲情したらしい、という話をな」

「おい、そんなことしてない！ 捏造だ！」

リックが騒ぐが、ユウは半目を向けただけで特に言葉を発しなかった。

カロンはそんなユウの容姿をまじまじを見つめた。風呂上がりのせいかやや上気した肌はまだ幼さの残る表情はミスマッチでありながら、どこか色っぽくも見える。そして、髪から香る石鹸の匂いはどこか甘さを含んでいる。

「私もどうかしているみたいだな」

「なにが？」

視線には気付いていなかったようで、カロンの呟きに首を傾げている。

「お前のことが可愛く見えたって話だよ」

肩を竦めてそう言うと、ユウは急に顔を真っ赤にして、

「バカッ！」

そう叫び、廊下へと消えた。

「……何かおかしなことをしたか、私は？」

今度はリックが半目をしてこちらを見てくる。

「お前って歯に衣着せない物言いが多いけど、こういう時にまでそういうのはよくないと思うぜ？」

「何故だ？ 容姿を褒めて怒られる理由はない気もするが……」

「だからバカなんだよ、お前は」

リックは溜息をついて調理に戻り、カロンは一人首を傾げた。

だが、結局何がおかしかったのかがわからず、そして、答えの出ないことに何時までも付き合うのも馬鹿らしいと思い、思考を打ち切った。

「リック、食事が終わったら、工房の整理を行いたいから手伝ってくれるか？」

「ん？ ああ、いいぜ。どうせ暇だしな」

気のいい友人だ。そのことに感謝する。

しかし、今はやることがない。匂いや作業工程からして、料理はもうすぐ出来るようだし、何かをするほどの時間はない。

やることを探し、テーブルの上に食器が出ていないことに気が付いて、食器を出すことにした。

「ステーキか？」

問いながら、手元を覗くと、微妙に違うもののようだった。

「安かったから、ミンチ肉をまとめて焼いてみた」

「へえ……」

内陸に位置するグランベル市では肉が主だ。魚も市場に並ぶこともあるが、日持ちのする干物や塩漬けが主だ。新鮮な魚もとある商人が取り扱っているが、行商人であるため、次にグランベルへ来るのは何時だかわからない。

ミンチ肉はまとまった形と量で提供されない代わりに、店に出せないような端なので、比較的安価に入手できる。その代わりに、衛生面でやや不安があり、よく火を通さないと腹を下すことになる。

リックが今行っている調理はミンチ肉をさらに細かく挽き、それを何らかの繋ぎを使って平たくまとめたもののようだ。どう考えても、ミンチ肉だけでここまで綺麗に成形出来るとは思えない。

三人分の食器を用意しながら、カロンはリックの手元を注視する。ソースはトマトソースをベースにジャムや香辛料、酒で味を調えたものらしい。カロンは香りでそれを判別する。

「楽しみにしてる」

「おう、任せておけ」

機嫌よく笑い、リックは固めた肉の両面をしっかりと焼いていく。

肉の焼ける良い匂いが充満してくる頃になると、自室へ引っ込んでいたらしいユウがまだ頭にタオルを載せたまま俯き加減でやってくる。

「どうした？」

カロンが不思議がって問うと、ユウにひと睨みされた。

「どうしたのか」

考え込み、そして、フォルからもらった包みを思い出した。あれは小物入れに入らなかったから、ベルトの突起に引っ掛けておいた。

落としてはいなかったようで、突起から外して包みを開けて中を確認すると、中身は木製の箱だった。白と黒の木材が組み合わさって、複雑な模様を織りなしている。

「お土産」

ユウに向けて差し出すと、ひったくるように奪われた。ユウはそれをまじまじと見つめ、四方八方から眺め回す。

「紙が入っているな」

包みの底には折り畳まれた紙が入っていた。広げて見てみると、それはその箱についてで、「模様をこの通りにずらすと開くらしい」

紙を手渡すと、ユウは無言で箱の開封に取り掛かった。程なくして箱が開き、中に何かが入っていたらしい。指を入れて、何かを摘み出す。

「それは？」

差し出されたものを受け取ると、木彫りの人形のような。だが、ただの人形のようにではなく、至る所に魔法的紋様が刻み込まれている。

「式神用の人形、かな？」

手順に従えば、動くらしいことはわかったが、肝心の手順が不明だ。まあ、人形に彫り込まれた紋様から逆算すればいいだけではあるが。

「そういえば」

ユウがようやく口を開いた。相も変わらずタオルが頭に載っており、表情を半分ぐらい隠していたが。

「フォルさんからの依頼ってなんだったの？」

カロンは言おうか言わないか悩んだが、結局、ぼかして知らせることにした。

「どうやら、楓の刀を新調したいらしい。それで、折角だから魔法剣にしようということで」

「ああ、そういうこと。カエデちゃん、剣持ってるもんね。使ってるところは見たことないけど」

今ので納得したらしい。まあ、嘘はほとんど言ってない。

「よし、出来たぞ」

ユウと言葉を交わしている間に、リックの方の料理は終わったらしい。大きめの皿に肉を載せ、その上に

ソースを掛け、周りに付け合せの野菜を盛り付けていく。それとスープとバケットを用意し、カロンたちを席に着くように促した。

「初挑戦だから、あんまり自信はないが……」

「お前が作った料理で不味かったことなんかあったか？」

揶揄するように言うと、リックは頭を掻き、

「ま、料理には自信あるからな」

「ふっ。誰が自慢しろと言った」

鼻で笑うと、彼は大げさに肩を落とす。

「持ち上げて落とすの得意だよな、お前って」

「褒めてもなんもあげんぞ」

「褒めてねえよ！」

「はいはい、さっさと食べよ。料理冷めるよ？」

ユウの割り込みでリックは落ち着いたのか、大人しく席に着き、

「んじゃ、お祈りしようとするかね」

「めんどくさ」

「駄目だよ、カロン。ちゃんと感謝しないと罰が当たるんだから」

「罰、ね」

カロンは馬鹿馬鹿しいと笑うが、ユウの顔は真剣だ。まあ、普通の人間ならそういう反応だろう。何せ、精霊は抗ってはいけないものの象徴。新暦になってすでに千五百年程経つが、未だに精霊への信仰は続いている。もっとも、信仰の在り方は大分変わったが。

「わかったよ」

ユウは精霊に対して盲目的ともいえる信仰を抱いている。いや、盲目的というよりも幻想を抱いている、と言った方が正しいのかもしれない。彼女は精霊という未知を超自然的なものとして見ている。ただ、それだけの話だ。カロンは現実を知っているが、それを今ここで言うのはあまりにも大人げない。

今はただ食事前の定型句を無感情に呟けばいいだけ。そう、それだけだ。

「豊穰を司る地の精霊、海の安全を守る水の精霊よ、その恩恵に感謝し、祈りを捧げます」

指を組み、額に当てる。水の精霊のくだりを入れるのは沿岸部で育った者に多くみられる傾向だ。

祈りが終わり、それぞれナイフとフォークを手に食事を始める。

ミンチ肉にナイフを入れると、肉汁が溢れてくる。

「わーお」

ユウが感嘆の声を上げ、切った肉の一切れをソースにつけて口に運ぶ。

「んま」

口に物が入ったまま発音したので、やや不明瞭な声ではあったが、彼女の感動は実際に口にしてみれば頷けるものだ。

「うん、これは上手いな。レシピに追加しておこう」

「そうだな。私も今度真似してみようと思う。それにしても、魔法薬の調合レシピはほとんど覚えなくせに、料理だけは無駄に得意ってどうなんだ？」

「無駄にって言うなよ。第一、魔法薬と料理じゃ全然違うだろ？」

リックは反論するが、カロンは首を傾げてしまう。カロンとしては両社にそう変わりはない。結局、何かを混ぜ合わせ、それぞれの良さを引き出していくだけだ。料理は味を、魔法薬は効能を引き出す。それだけのことだと思うのだが、

「魔法薬の効能ってのが、ピンとこねえんだよ。味だったら食べて知ってるから大体わかるんだけどよ」

「なるほど、そういうものか……直感的にわからないと駄目なのか」

「多分な」

それから料理の話の時折魔法薬の話題を混ぜ、その日の夕餉は終わった。

翌朝、カロンは工房の扉を開け、思わずため息をついた。

元々の家にあったものを急ぎよ運び込んだだけだったので、片付いていないのは当然だったが、それ以上に酷い。

積んであった山の一つは雪崩を起こし、箱の中身を見事なまでにばら撒いている。

可能性があるとなればリックかユウだが、おそらくはリックだろう。なにせ、カエデを誘ったのがリックだったという話だ。例の球体を探そうとして、山を崩してしまったのだろう。

嘆いていても仕方がない。そう割り切り、カロンはこの惨状を收拾すべく、手近な箱から手を付けて行った。

運び込んだものは二種に大別できる。一つは工房に必要な工具類。手入れは欠かしてなかったので、二年間まともに使っていなかったが、十分に使用できる状態にある。

もう一つは過去に作った魔法具だ。試作品も含むため、数としてはかなりのものだ。実用に耐えられるのはカエデにもあげた封印球や魔法杖ぐらいであろうか。他人から見ればガラクタの山なのだろうが、捨てる気は毛頭ない。愛着がある、とかそういうことではなく、単純に『使えるから』という理由だ。

カロンは工具の歪みや汚れなどを確認しながら、手早く整理を済ませていく。物が多いとはいえ、実際に箱から出して整理しなければならないのは工具類だけなので、後は軽く分類して部屋の隅に積んでおくだけだ。

昼過ぎにはあらかた片づけも終わり、昼を作りには工房を出ると、料理をする音と、食欲を刺激するいい香りが漂ってきた。

「リックか？」

今日の当番はカロンの筈だったが、気を利かせてくれたのだろうか。

居間に行くと、あり得ない景色をそこに見た。

「何でお前らがいるんだ？」

「なんでって。私がここに来たからよ？」

「ラナフェリア、それは答えになってないかと」

「細かいことをうるさいわね。口動かしてないでさっさと作りなさいよ」

「……………」

カロンは理由を詮索するのも馬鹿らしくなってラナフェリアという背が低く、腰以上まで伸びた煌びやかな金髪の少女を見る。顔の横に編んだ髪をひと房垂らしているのが特徴だ。淡い紫色の瞳で料理をしている男の手元を覗き込んでいる。フルネームはラナフェリア・J・ウルクレン、通称はランである。

そして、そのラナフェリアに急かされて料理を再開したのはメガネをかけ、灰色の髪と瞳を持つ少年だ。名前はシリル・シャーレムという。

実はこの二人、すでに学園を卒業していて、市立の研究所に勤めている。それも、ランは室長、シリルはその補佐として、だ。そんな優秀な二人だが、何故ここにいるのだろうか。シリル

に至っては何故か昼食を作っているようであるし。

「出来た」

「ふふ、上出来よ、シ rilル。さっさと皿に盛り付けなさい」

「わかったよ。ラナフェリアは座っててくれるかな？」

「ええ、そうするわ」

相も変わらず尊大なことだ。カロンもなにも言わずに何時もの席に着く。

「しかし、結構な量を作ったものだな？」

「ああ、リチャードさんがそろそろ戻ってくるようだし、ユーロシアさんも今は自室にいるだけなので」

「じゃあ、匂いにつられてやってくるな」

そう言った途端、居間にユウが現れ、

「人を食欲の化身みたいに言わないでよ。って、こんにちは、ランとシ rilルさん」

「こんにちは、ユーロシアさん。はい、完成」

深さのある器に作っていたスパゲッティが盛り付けられた。スープ仕立てらしく、汁けが多いが具材の量も多いため、まさしくスープ感覚で楽しめそうだ。味付けの基本はクリーム系らしい。

「ただいま～……ああ、しんどかった。あの女狐め。オレをこき使いやがって」

リックが愚痴をこぼしながらやってくる。そして、居間にいる面々を眺め、

「久しぶりだな、おい。ユウの合格祝い以来じゃねえか？」

「ごきげんよう、リック。相も変わらず身だしなみがなっていないわね」

「へいへい。お嬢様もあいかわらずのようで」

ランの言葉を軽く受け流し、手を洗う。

「リチャードさん、台所勝手に借りましたけど、大丈夫でしたか？」

「ああ、問題ねえよ。てか、許可取るなら、オレじゃなくてカロンにじゃねえか？」

ひらひらと手を振り、カロンを顎で示す。シ rilルは横目でカロンを一瞥し、

「カロンはそういうことを気にする方じゃないからな」

「知った風な口を。まあ、あながち間違いじゃないけどな」

お互い、気心は知れてる。むしろ、そのせいで遠慮がなくなっていることも多々あるが、心知らば諍いは気まずからず、という言葉もある。

「で、何の用なんだ？」

単刀直入に切り出すと、スパゲッティをフォークに巻く手を止めて、

「簡単に言うと、ちょっとした翻訳よ」

「ちょっとしたやつなら、自分でやったらどうだ？」

「いいじゃない。私たちの仲でしょ？」

不遜に言い放ち、スパゲッティを食す。カロンは何も言う気がなくなって、黙って手元の料理を平らげることにした。

しかし、シ rilルもいい腕をしている。両親がそれぞれに料理関係の職場で働いているせいか、

彼自身も相当に料理ができる。恐らく、子供のころから仕込まれたのだろう。それと関係あるかはわからないが、薬学関係の成績がよい。

「ああ、幸せ。リックの料理もおいしいけど、シ rilルさんの料理もおいしい。うちに住み込んでくればいいのに」

「ありがとう、ユーロシアさん。しかし、住み込みは少し困るな。俺には仕事があるから」

「あら、仕事がなければ来たそうな口振りね、シ rilル。なら、研究所やめてもいいのよ？」

「ら、ラナフェリアさんッー」

シ rilルが慌てて顔色を変えるが、言った当人は意地悪そうに微笑んでいる。反応を見て楽しんでいるのがよくわかるが、シ rilルは割合本気に受け取っている。

「何時も通りの軽口だろうに。シ rilル、少しは落ち着いたらどうだ？」

「ああ……軽口、か。どうも俺は冗談がわからない人間らしいな」

頭を振って動揺を振り払おうとするが、表情は晴れない。

「真面目なのがお前のいいところだろ？ まあ。わからなさすぎるのも駄目だが、お前くらいなら大丈夫だろ」

「そう思うことにするよ」

苦笑い、彼も料理を口にする。自分で作ったからか、特に表情も変えずに食している。カロンも冷めては折角の料理に悪いと感じ、フォークに麺を巻き付けて食べる。

まるやかな口当たりに、胡椒がアクセントになっていて、食べてて飽きない。また、根菜を主とした具材は、食べごたえと満腹感をもたらす。

「相も変わらず料理が上手いな」

「だよねだよね」

「ありがとう。だが、褒めてもなにも出ないぞ？」

「おだてておけば、次にもっと頑張ってくれるかも知れないだろ？」

カロンが笑みと共に言うと、彼は頭を掻き、

「まあ、そういうことなら期待に応えないこともないな。うん、次来るときは少し凝ったものを作ろう」

「わあ、楽しみ！」

ユウが歓喜の声を上げ、何故かランが自慢げに薄い胸を反らし、

「私が見込んだだけのことはあるわね」

カロンは溜息をつき、

「別に、思えのために料理の腕を磨いたわけじゃないし、そもそも、成績がよかったから一緒に働けてるんだろ？」

「それはそれ、よ」

本当に得意げだ。まあ、助手の優秀さは研究室という組織の中では一種のステータスだろう。その優秀さの方向が若干間違っている感は否めないが。

雑談を交わしつつ、料理が冷めて美味しくなくなっていくうちに平らげてしまうと、ランは持参の鞆から一枚の繊維紙を取り出した。

「食べ終わって早速だけど、これが依頼する翻訳よ。どう、出来るかしら？」

カロンはその紙を受け取り、ざっと目を通す。

「古代語か？ それも暗号化された」

「そうみたい。古代語云々はともかく、暗号解くのは得意分野じゃないから」

嘘をつけ、とは思ったが、口には出さずに黙って紫色の瞳を見返すと、微かに笑みを見せる。  
何かを企んでるのは明白だが、それはこの依頼を受ければ明らかにはなるだろう。

「わかった、引き受けよう。で、期限は？」

溜息と共に問うと、ランは首を傾げながら、頬に指を当て、

「えっと……次の闇の日に取りに来るわ。それまでお願いしていいかしら？」

「闇の日、か。今日が水の日だから四日後。ああ、わかったよ。それまでには出来るだろうさ。  
それに、翻訳ごときに時間を割いている訳にはいかないからな」

「お願いね。ところで、なにか用事でもあるのかしら？」

「まあ、ちょっと依頼がな」

「ふうん……誰の？」

何とも突っ込んだ質問だ。

「依頼人の情報は他者に語らない。基本だろ？」

「いいじゃない、ケチ」

「ラナフェリアさん、それは少々問題あると思う」

さすがにシリルが咎める口調で言うと、彼女は渋々と言った様子で引っ込んだ。

「好奇心旺盛なのは結構だが、それで要らぬ災厄を巻き起こさないでくれ」

「なによ、私が災厄の種みたいないい方して。失礼ねっ」

自覚がないのは相変わらず。短い期間ではあったが、学院で過ごした期間だけで、数知れない程のトラブルを起こしていたのはどこの誰だったろうか。シリルもその時のことを思い出しているのか、顔に手を当てて俯いていた。まあ、彼の立ち位置はその頃からあまり変わっていなさそうだが。

「さて、食事も済んだし、依頼も受けて貰えた、ということで。そろそろお暇させていただくわ。  
ちょっと用事もあるし、ね」

立ち上がって、鞆を肩に掛ける。そして、シリルへ、

「シリルは先に研究室に戻って、この間の実験結果をまとめておいてくれる？」

と言い放ち、そそくさと部屋を出て行った。

「慌ただしい奴だな。そんなに忙しいなら、雑談なんかしなければいいものを」

「慌ただしいのは同感。でも、お前も少しは気をつけてやれないのか？」

「……胃に穴があくぞ」

「……………」

シリルは溜息をつき、

「俺は頼まれたことがあるから、もう帰る。済まないが後片付けは頼む」

「頼まれた」

リックが請け負い、シリルは礼を言ってから家を後にした。

カロンは彼を見送り、居間に戻る。すると、ユウがランの残した紙とにらめっこしており、「お前に解ける訳ないだろ？ 教えてないんだから」  
「それはそうだけど。うう、これで解けたらあたし天才かも、と思ったのに」  
「そいつはちょっと無理があるだろ。論理問題ならともかく、語学は知識がないとさっぱりだからな」

「それもそうか。はい。依頼されたんだから、しっかりやってね」

紙を手渡される。カロンはそれを受け取り、

「ちょっと工房に引きこもるから、夕食の時間になったら声を掛けてくれ。悪いが、後片付けは頼む」

言い置き、工房へと足を向ける。ユウの「任された」という声につい笑みを浮かべ、そのことに気が付いて口元を手で覆う。

何やらきな臭くなってきたが、彼女だけは巻き込まないようにしなければ。そう思うと、不思議と心が引き締まる。

カロンは工房の扉を開き、仕事へと気持ちを切り替えた。

カロンは工房の机に向かうと、小さな黒板と白墨を用意して渡された紙の内容を『正しく』書き直す。

ランは古代語の暗号などと言ったが、全くそんなことはない。解き方と対応表さえあれば誰にでも解けるような代物だ。なにせ、ランが考え付き、二人で秘密のやり取りをするときに使おうと言って教えられたものだ。

この暗号が使われていると判断する基準は最初の一文だ。この文章そのものに意味はなく、ただ暗号を使っていることを示すためのもの。しかし、カロンが早々に退学となったため、使う機会は一度しかなかったが。

カロンは懐かしさを覚えつつ、内容を読み解いていく。四年前のものだが、記憶には残っていたので、対応表も見ずに済んだ。

出来上がった復号文を読んで思わず頭を抱えた。

『過激派が水面下で行動中。注意して』

書かれていた内容はこれだけ。

十分大変な情報だが、つい先日フォルにも同じことを言われたばかりで気が滅入ってくる。ユウの学院生活がこれからだという時に、何故こういうことが起こり始めるのだろうか。呪われでもしているのだろうか。

四年前に彼が退学になった出来事だって、間接的に“過激派”が関わっているとグランベル市議会議長に教えられた。

そのことがあって以来、カロンは自宅で静養していたり、旧魔法街の片隅で雑貨屋を営んで静かに暮らしていたというのに、彼らはこちらの意志とは関係なしに行動を始めたらしい。

このような情報をランが得られるのは彼女が研究所の室長という立場だから、という訳では決していない。これは彼女個人が持つ情報網からのもので、それ故に信憑性は高い。

しかし、この情報を知らされたところで、カロンにどうしろというのだ。今はただの学生の身。行動力なんてたかが知れている。まあ、フォルはその状態を知ってか知らずか、カエデのための武器を作ることを依頼してきたわけだが。

それを考えると、フォルは戦争の準備をしている訳だ。もし“過激派”が本格的な行動を起こした時に、対抗する手段を欲している。

「依頼されたからにはやるけど……」

ひとり呟き、筒のように丸めていた大判の紙を壁際の物入れから引っ張り出し、大きな作業台の上に広げる。

カロンは癖がついて丸まりそうになっている紙を圧力をかけて伸ばしながら、考え込む。

それは“過激派”の行動の影響がユウに及んだ場合のことだ。カロン自身やリック、それにツキノたちに降りかかっても、自分でどうにかできるほどの実力は持ち合わせている。だがしかし、ユウに魔法の理論は教えたが、戦い方は愚か、実際の使い方さえ教えていない。

筋は良さそうだから、使い方程度はすぐに覚えるだろうが、

「戦わう、か……」

無理な話だ。カロンのように幼少の頃から魔法に慣れ親しみ、息をするように使える上、好敵手と争いながら鍛えた戦い方が一朝一夕で身に付く訳がない。

それにそもそも、ユウに争う方法を教えたくない。これは勝手な我がままだと自覚しているが、それでも戦ってほしくない。それが自衛の手段であったとしてもだ。そんなことをするぐらいなら、カロンが全てを引き受ける。その方がまだ。

カロンは紙を伸ばす手を目の前にかざして見る。

戦いを知っている、血に染まったこともあるこの手。肉を裂く感触も、骨を断つ衝撃も、血潮の熱さとその冷たさを知っている。この心は死の恐怖と相手の命を絶つということの重さを知っている。

だが、ユウにそんなことを知ってほしくない。血で血を洗う争いは彼女にとって他人事であって欲しい。

「ふう……」

考えても詮無きことか。結局、カロンに出来ることはユウを争いから遠ざけ、被害の及ばないようにすること。それはリックも重々承知していることだろう。

あらかた紙を伸ばし終わると、工房の扉が強く叩かれた。入室を許可すると、リックが何とも言えない顔で立っていた。

「さっきの翻訳、できたのか？」

口調に何時もの軽さがない。カロンは黙って黒板を指差すと、リックはそれを目で追う。

「やっぱりそういうことか。しかし、ここは一応学院だぜ。それなりの防備はあると考えていいんじゃないのか？」

「それで四年前の体たらくか？」

皮肉気に告げるとリックは眉を寄せ、

「だからこそ強化されているべきだろう？」

「ところが、そうもいかなかった。ツキノやミリアに聞いた話だと、行われたのは補修工事と証拠隠滅だけ。廟はそれきり調停官を数名派遣しただけで、後はだんまり」

「調停官、ね。つまり、二度目が起ころうが何しようが、オレらは指をくわえて見てろってことか？ 手を出したら処罰する、と脅しまでして」

「そういうことだろ。あいつらにとって重要なのは、人をアレから守ることじゃなくて、如何にアレを刺激せずにいられるかだ。つまり、人が襲われても、反撃するなど言い渡してある通りだよ」

「絶対者。世界の支配層。けっ……そんな大層な存在じゃなかりょうに」

リックは心底不快そうに吐き捨て、椅子へ乱暴に腰掛けた。

「だが、一度は人類を滅亡寸前まで追い込んだのは事実だ」

「だから障るな、と？ 馬鹿げてらあ」

リックの言い分はもったもだ。カロンがアレと言い表した存在、精霊はかつて人類を滅亡させかけた。何故助かったのかは知らないが、カロンの予測は現在で言う精霊廟との間で何かしらの

取引がなされたのだろう。露骨に言ってしまえば、大人しくしているから命だけは取らないでくれ、と。

しかし、人類は再びかつてには及ばないまでも栄華を手にするようになってきた。だからこそ、“過激派”——精霊の内、人類を脆弱で愚鈍な存在と称する者らが動きだし、再び牙を剥こうとしている訳だ。

「で、防備がないならどうするんだ？ まさか、議長もなにも考えなしにお前をここに戻したわけじゃないだろ」

「薄々は気付いていたと考えるのが自然だが、どの程度の危機を見越していたのやら」

「下手をするとかつての二の舞ってか？」

「十二分にあり得る。だが、今度はユウがいる。絶対に巻き込みたくない」

「だとしたら、ここに来たのは失敗だったかもな。そばにいれば守れるかもしれないが、相対的に危機に近くなる」

カロンの同意にリックが溜息をつく。

「八方ふさがりか？」

「そうとも言えるが、今は判断材料が少なすぎる。最優先課題はユウを争いから遠ざけること」

「それ、無理難題じゃねえか？ ユウのやつ、きっと自分から首突っ込んでくるぜ？ しかも、お前の危機だ、なんて言ったら目の色変えるぞ？」

「それはわかっているが、やらないといけないことだ。お前だってあいつに血は見せたくないだろ？」

「そりゃまあ、な。あんなもん、オレたちが背負ってりゃいいもんだ」

リックが苦々しい笑みを見せる。彼もまた死を知っている人間だ。その時にツキノと知り合っただけなのだが、それはまた別の話だ。

「で、八方ふさがりのお前は紙を広げてなにをしようとしてんだ？」

問いには答えず、紙にペンを走らせる。リックも答えを期待していた訳ではないらしく、カロンの作業を黙って見つめる。

「設計図か。それも……剣？ いや、この独特の形状は刀か」

「正解。フォルは戦争の準備を始めるそうだ」

「それでお前に依頼？ 調停官に睨まれるぞ？」

「仕方ないさ。私が直接動けないなら、動ける人間に動いてもらうだけ。それだけだ。それにいちいち調停官の顔色窺ってたら、まともに魔法なんか習えないだろ？」

「そりゃそうか」

リックはどうしてもよくなってきたのか、椅子に深く腰掛け、目を閉じた。

「ちっと寝る。夕飯前には起こしてくれ」

ツキノの手伝いで疲れていたのだろう。そう言うや否や、すぐに寝息を立て始める。本当にリックは寝つきがいい。だが、それもカロンのことを信用してくれているからだろう。そのことに笑みを得つつ、しかし、カロンは戦うための道具の設計を続行した。

ユウは学院の敷地を放浪していた。

正直言ってやることがない。が、かと言ってつまらないわけでもない。

カロンにもらった精霊石の入ったペンダントを大事に首からかけ、そのペンダントヘッドを握り締める。

そうして、石の存在を意識しながら見る景色はとても幻想的だ。淡く色付いた靄のようなものが立ち込め、世界を綺麗に彩る。

だが、不満が残らない訳ではない。なんといっても、カロンはユウに魔法の使い方を教えてくれないのだ。折角精霊石をもらったというのに、これでは無用の長物ではないか。

そんなことを思いながら、舗装された道を逸れ、春に咲くだろう草花の蕾が膨らみかけた草原へと足を向ける。

ユウは草原の半ばまで歩いて行くと、蕾を傷付けないように注意しながら、裸足になって寝転がった。

目は閉じない。きっと、目を閉じれば眠ってしまうから。それほどまでに安穩としたこの景色。ペンダントにそっと手をやり、蓋を開く。

四色の光が灯る不思議な石がそこにある。

リックが語った話だと、それぞれの色に魔法の属性が関係しているらしく、つまるところ、この石は四属性すべてを備えているということになる。まあ、第二等級ともなれば当然でもある。とある精霊から渡されたという石。はたして、その精霊とカロンの関係はなんだったのであろうか。

疑問はある。それに、本当にこの石の持ち主が自分でいいのだろうか、ということも。もちろん、共鳴光は今もほのかに灯っていて、ユウの中に何かが流れ込んでいるのが確かに感じられるのだけれど。

「でも、ね……」

フロイス市議会連邦の西岸に位置する港町で生を受け、港の食堂の娘として生きてきた。七歳、つまり、七年前にセシリアと名乗る魔導師――魔法使いの上位職の少女と出会い、魔法に憧れただけの少女。それが、ユーロシア・アルコットだ。つまり、セシリアと出会うことさえなければ、ユウは今でも食堂で給仕をしているだけの、どこにでもいる娘だったということだ。

ユウはカロンの背中に見た翼を思い出す。いや、よくよく思い返してみると、あれは翼じゃない。翼の形に酷似した魔法陣。他の生徒を見たときには、そんな特殊な形状をした者は見当たらなかった。あれは一体なんだったのだろうか。

カロンへの疑問は探せば切りがなくなるだろう。フルネームからして、恐らく貴族の筈なのに、旧魔法街の片隅でひっそり暮らしていたり、四年前に学院を退学になったりと。謎が多すぎる。その反面、彼の性格は大体わかった。歯に衣着せぬ物言いだが、逆に言えば、褒めるときも直接的な言葉を用いるから、困ったものである。また、魔法の技能も人並み外れているようだし。

「……………」

ユウにとってカロンはどういう存在なのだろうか。魔法を教えてくれた親切な人。でも、それだけじゃない気がする。もっと何か、違う感情。

もやもやしていて、言葉に出来ない。

そんなことを悶々と考えていたせい、人の気配に気付かなかった。

「ユウちゃん」

「あっ、ひゃ、ひゃい！」

噓んだ。

慌てて起き上がって声を掛けてきた人物を見ると、カエデだった。いや、見なくても声でわかった筈なのだが、慌てすぎて頭の中が真っ白になっていた。

「どうしたんです？ そんなに慌てて」

穏やかに微笑みながら、カエデが隣に腰を下ろす。

「なんでもないっ」

強い語気で言うと、カエデは頬に手を当て、困ったように笑う。

「カロンさんのことですか？」

「うぐ……」

お見通しだったらしい。ユウは隣に座り直し、膝を抱える。

「カロンって、あたしにとってなんだろうって、そう思って」

「ユウちゃんにとってのカロンさんですか。まあ、端から見れば師匠と弟子、なんでしょうけど。でも、そういうことをききたいわけじゃないですよ？」

「うん。どっちかという、感情の話。どう……思ってるか」

カエデは穏やかな笑みを浮かべ、

「それは、答えを焦らなくてはならないものですか？」

問われ、ユウは考え込む。しかし、やがて首を横に振った。

「では、急がなくてもいいと思います。多分、それはゆっくりと心になじんでいくものでしょうから」

「まるで、答えを知ってるかのような言い方だよ、それ」

「わたしにだってわかりませんよ。ただ、そういう類の感情だ、ってことぐらいしか」

「ふーん。あ、でもさ、カエデにとってフォルさんはどういう人なの？」

興味本位で訊いてみると、彼女は少し眉を寄せてから、

「父替わり、というのが正しいのかもしれませんがね。本当の父は風来坊で、いつも別の場所にいることが多いものですから、その分フォルさんが面倒を見てくれたので。まあ、家族みたいなものです」

「家族か。家族……」

自分とカロンに当てはめてみるがしっくりこない。父と子というには歳の差は近いし、かと言って兄と妹というのも。いや、当たらずとも遠からずか。ある意味納得してしまったユウはくすりと笑う。

「兄かも。あたし、男兄弟ってほしかったんだ。いつもはぶっきらぼうでも、いざとなると頼り

になる、そんな兄弟が」

「まあ、そういう意味ではカロンさんは的確ですよ。面倒見がいいですし」

「そうなんだよね。カロンってば、面倒見が良くて、料理もそれなりにできて……ちょっと性格悪いけど」

考えてみると、それほど欠点と言える欠点がないことに気が付き、言ってる途中で恥ずかしくなった。

「なんでもできちゃうんだよね、カロンって。なんか、付け入る隙がないっていうか」

それはなんだか悲しい気がする。結局、ユウとはカロンにとってなんなのか。暇つぶし、の線もあるけど、それはあんまりにも悲しいので考えない。

「でも、カロンさんはユウちゃんのことすごく大事にしていますよね」

「そお？ そんな気、ぜんぜんしないけど」

まあ、随分世話を焼かれている、とは思いますが師匠と弟子以上のものではない気がする。

「自分ではわからないものですよ」

「そういうカエデも、カロンには可愛がられてるじゃん」

拗ねた口調でからかったつもりが、彼女はほんのり頬を染めて、

「可愛がられてるなんて、そんな……」

「あれー……」

なんか雲行きが怪しい。

「カエデ、もしかしてー」

「い、言わないでください！ わたしにもよくわからないんですからっ」

物凄く慌てられた。もしかしたら脈あり、なのかも知れない。そう思い、カエデとカロンが好きあつてるところを想像しようとしたら、胸がざわついた。

「……………」

その感情をうまく処理できなくて、カエデの方もまだ慌ててるのか、言葉はなく、沈黙が二人の間に下りた。

ユウは寝転がって、空を眺めた。高く澄んだ蒼い空。

「……カエデって魔法使えるよね？」

しばらくして、ユウは言葉を発した。カエデは少し驚いたようで、

「ええ、家柄として、子供の頃から。ユウちゃんはまだ？」

「うん。こないだ精霊石もらったばかりで、実際に使ったことないし、カロンも教えてくれなんだ」

カエデはその言葉に少し考え込んでから、

「カロンさんの魔法の使い方は一種独特なものがありますからね。正直、あの人に習うとその癖のせいで後に他の人に習う時に苦労しますよ、きっと」

「癖？ あたしはそれすらもよくわからないんだけど……」

「わたしは環境が少々特殊で、使うよりも識るほうに重きを置いていますから」

「分析系ってこと？ それはそれでうらやましいよ。そういうのって、研究室入りに役に立つん

でしょ？」

「まあ、それは確かなんですけど……」

言葉を濁したカエデの顔を見ると、やはり浮かない顔をしている。

「あたし変なこと言った？」

「いえ、そういうわけではなく。わたし、研究室に志望するつもりはないんですよ。どちらかという、地方の守備隊を望んでいるので」

「しゅび……たい」

不思議な気がした。彼女なら、せめて教官の職に進むと思っていたから。

「どうして、とは聞かないんですね？」

「聞いてもいいなら聞くけど……でも、聞かれたくなさそうだから」

「聞かれたくない、というよりも」

視線がふっと遠くを見る。

「言葉がわからないんですよ、まだ」

いつも浮かべている微笑みが、今は儂げなものに見え、ユウは横に投げ出されていた彼女の手をそっと握った。

「大丈夫だよ。みんないる。あたしも、カロンも、それにフォルさんも。リックだっている」

「ありがとうございます」

その顔に浮かぶ確かな安堵を見て、ユウは朗らかに笑う。

「あたしはあんまり役に立たないかもしれないけどさ。でも、聞くだけならできるから」

「いえ、わたしはユウちゃんに出会えてほんとによかったと思ってます。こんなにも、安心できますから」

カエデはユウの手を握り返し、そして、唐突に寝転がった。

顔が近くなり、彼女の息遣いが感じられる。同性ながら、どきりとしてしまうような愛らしさ。

「ほんと、反則だよ」

ユウは笑い、カエデに抱きつく。

「きゃっ——ちょっと、いきなりなんですか。びっくりしましたよ」

びっくりしたと言いながら、それでもユウを受け止めてくれるぬくもり。時折儂げな表情をする彼女を、ユウは絶対に離さないと心に決めた。

しかし、この胸の大きさはいかんともしがたいな、とも思い、その胸に半ば埋もれるユウだった。

カロンは工房で作業を開始した。リックやユウには立ち入りを禁じ、カエデのための刀を作る。

炉に熱を持った石炭をくべ、鞆（ふいご）で空気を送る。石炭にあった種火が空気を得て強く熱され、石炭を赤く染める。それを目的の温度になるまで繰り返す。

その作業が終わったころには工房の温度はこれ以上ないくらいまで上がり、中にいたカロンの額に汗がにじむ。

しばらく炉の様子を確かめ、火勢が弱まることがないのを確認すると、五つの箱を足元に置く。

中には鉱石が収められているが、これのひと箱でもきちんとした筋で売却すればひと月分の生活費は優にまかなえるだろう。

すべての箱の蓋を開く。そこには箱ごとに五色の鉱石がある。それは桜花に伝わる魔法属性である五行の各属性に対応する魔素を内包するもので、そのなかでもとりわけ純度の高い物を厳選して集めた。金で買ったものもあれば、採掘地で自ら掘り出したものもある。苦労しただけの価値はあり、市場にはめったに出回らない純度のものまで手に入った。

木属性の褐織鋼（ブルネス・フィブラ）。

火属性の緋賢石（コチナム・サピエン）。

土属性の黄粘土（フラバス・ルートウム）。

金属性の金硬晶（アールム・ディフィシル）。

水属性の蒼麗鋼（ヒアシント・パリーダ）。

カロンは五行の相生と相克を利用した魔素構造体破壊用の術式を作っていた。作用物体中では相生による強度増強などを含めた機能強化を行い、そして、相克の力でもって魔素の構造を破壊する。ただし、これは破壊する対象が属性を持っていた場合の話。

もしも、属性の偏りのない存在だった場合、刀を突き刺した時点で強制的に属性の偏りが発生するように仕向ける。

内容としてはあげつないかも知れないが、こうしたのには理由があった。

任意属性の付加は破壊しない場合でも有用であるからだ。つまり、水を加熱したい場合、その水に予め火の属性を与えておけば容易になる。そういうことだ。

そして、この刀自体が五行のすべてを司るため、それぞれの属性を余すところなく使える。相生と相克を基本とする桜花の魔法において、すべての属性を使えるというのは非常に有利だ。

カロンはそれぞれの金属を加熱し、刀の制作過程に則って小割や折り返し鍛錬をしていく。

その途中で、カロン自身の指環に予め覚えさせておいた相生と相克の術式を微細な単位で繰り返し刻み込んでいく。

これらの過程は以前に蛟を作った時と同じであるから迷いはないが、刻み込む術式の数と素材の複雑さによる難易度は当然ある。

結局、ほとんど飲まず食わずで、途中をリックに手伝ってもらいながらも満足のいく刀を作り

終わったのは三日後。だが、まだ砥ぎも終わっていないし、鞆もない。銘を刻む気はなかったが、それでも最低限の拵えをしてからわたすべきと判断した。

三日ぶりに工房の外に出ると、ユウがむすっとした顔をしていたが、カロンの顔を見るなり満面の笑みを浮かべ、皿を突き出してくる。

皿の上には黒いもので包まれた白米の塊がごろごろと載っていた。形は不恰好で、見た目も不思議なものだったが、手を布巾で拭ってから一つを手にとって口に運ぶと、存外に美味しかった。

「これは？」

一つをあっという間に平らげ、もう一つに手を伸ばしながら問うと、彼女は自慢げに胸を反らし、

「おにぎり、って言うらしいよ。桜花の料理なんだって。この間作り方聞いて、今日試に作ってみたの」

「そうか。この、外に巻いてあるのは？」

「ノリ、って言ってたかな。なんでも、海藻を平たく集めて焼いたものらしくて。でも、海の香りがして、あたしは好きだな」

「そうだな。香ばしい」

塩を振っただけの白米の塊に海の香りがするノリという食材のシンプルな料理だが、空腹もあり、五個あったおにぎりはあっという間にカロンのお腹に収まった。

「ご馳走様。美味しかったぞ。今度、カエデにも礼を言っといてくれ」

「うん、言っとく」

朗らかな笑みを浮かべ、皿を洗いに居間へと走り去っていくユウ。

カロンはその背中を見送り、それから背筋を思い切り伸ばす。背骨が音を立てる。

「眠い、な……」

仕上げは明日以降に回して、今日は休んだ方がいいかもしれない。食事をして腹が満ちたせいか、今度は睡魔が襲ってきた。

カロンは少々ふらつく体を奮い立たせ、階段を上って二階の自室にたどり着くと、汚れた作業着のまま、ベッドに飛び込み、そのまま意識を失った。

そろりー

ユウは足音を忍ばせて階段の下から上階を見上げる。カロンはよほど疲れているのか、こちらの気配に気づいた様子もなく、ふらふらとした足取りで自室へと向かったようだ。

ベッドの軋む音と扉が閉まる音を確認した後、ユウは再び忍び足で工房へと向かう。

扉を開けると、まだこもっている凄まじい熱気が吹き付け、一気に汗腺から汗が噴き出した。

「暑いなあ……」

汗で張り付く服を気持ち悪く思いながら、ユウは工房へと足を踏み入れる。ここへは滅多に入れさせてもらえない。カロンが工房にいて、彼に用事があるときも入口までで、中には入れさせてもらえない場合がほとんどだ。

そのこと自体も不満だが、それ以上に、彼が物を作っているところを決して見せてもらえない。それが非常に不満だ。

その不満の解消として、今は作り上げたばかりだと思われる魔法剣を見にやって来た。

最初のうちはカロンも制作物そのものを秘密にしたがっていたが、どうせカエデからばれると思ったのか、魔法剣を作る、ということだけを言葉少なに教えてくれた。そして、彼はその作業を一通り終え、今は疲労困憊。恐らくは眠っているはず。この隙以外に工房へ忍び込んで出来立ての物を見る機会などないだろう。

幸い、リックも今は外出している。

工房の中を見回すと、未だに赤く燃えている炭が残る炉の前に金属質の棒が放置してあった。

「これ、だよね……」

恐る恐る近づいて、少し遠巻きにして眺める。危険はなさそうだ。

剣を作るとは言っていたが、まだ刃の部分を砥ぎ出してないせいか、鋭利な輝きはない。ただ、桜花刀独特の刃紋は見るだけで心惹き込まれそうなほど美しい。これをカロンが作り上げたということについては、驚嘆のため息しか出てこない。

曇りない鏡面のようなその刃にそっと息を吹きかけると、その部分から波紋のように五色の波が広がり、細やかな魔法陣が浮かび上がった。

その反応が面白く、何度も位置を変えて息を吹きかける。その度に虹のような色彩が広がり、違う魔法陣が浮かび上がる。

それへ夢中になっていて、胸元からペンダントが零れ落ちそうになっているのに気が付かなかった。

しばらく反応を楽しんだ後、ふっと身を引くと、辛うじて引っ掛かっていたペンダントが襟から落ち、鎖に引かれて振り子のように揺れ落ちる。

なでしこのレリーフが刻まれたペンダントは一直線に刀の刀身へと向かいながら、中から光を漏らす。そして、刃に触れた途端、

リンー

と、涼やかで耳の奥に響く音が奏でられる。

だが、起こったことはそれだけではなかった。ペンダントから漏れ出た光は刀身へと降り注ぎながら、そこに刻まれた数多の魔法陣を照らし出し、そして、吸収を始めたのだ。

「な、なにこれっ!？」

次々と魔法陣が浮かび上がり、それを精霊石の光がなぞって転写する。その動きが刀身全てをなぞり終わると、今度は吸収した魔法陣を宙にいくつも浮かび上がらせ、そして、何らかの法則に従ってまとめていく。

その動きはとてつもなく素早く、目で追うのは不可能であった。

まとめ終わった魔法陣は再び精霊石の中へと吸収され、その作業がすべて終了すると、ようやく辺りは元に戻った。

「今のって……魔法陣の登録（アドノート）？」

『登録』。それは精霊石の独自の能力で、まさしく精霊石に魔法陣を登録するもの。一度登録された魔法陣は精霊石の契約者によって任意の展開が可能で、しかも、局所的な陣の書き換えも可能という。

それを精霊石が生きている証左だという魔法使いもいるが、それは定かではない。そもそも、精霊石の成り立ちすら、完全にはわかっていないのだ。わかっているのは、それが精霊に由来するものだ、ということだけ。

ちなみに、他の媒介は『登録』という能力は備えていないため、魔法陣を描いた紙片や金属板を用いて魔法を行使する。

先日の魔封武技の相手だったポラックも衣服の中に忍ばせるなりして、魔法陣を所有していたのであろう。一方、カロンは精霊石の所持者だったため、それから直接展開して魔法を使っていた。

「……………」

それにしても、今現在ユウの所有している精霊石、四煌宝珠には魔法剣に込められていたものと同じ魔法陣が登録されたことになる。

効果など知る由もないそれらは、所有していても宝の持ち腐れのような気もするが、かといって、このことを相談すれば勝手に工房へ忍び込んで、魔法剣に触れたことがわかってしまう。

結局、そのままにしておく意外に選択肢は見つからず、ユウは行き以上に細心の注意を払いながら工房を後にした。

魔法陣の効果については、後日カエデにでも尋ねればわかるだろう。そういう、楽観的な思考もあった。

カロンは魔法剣のほとんどを仕上げ、爆睡してから更に数日後、工房で自分の仕事を満足げに見つめていた。

柄や鞘も含めてすべてを作り上げ、そして、満足いく砥ぎ上がり。

白鞘から抜き出せば、刃紋の形も美しい白刃が工房のそう強くはない明りを受けて鋭利に煌めく。

実をいうと刃紋の形は古代魔法の魔法陣を利用した特殊なものだ。さすがに、桜花刀独自の反りは切れ味を重視したもので、魔法的な意味は持たせていないが、それ以外の拵えについては随所に魔法の技術を散りばめてある。

カロンは完成品を持って家を出る。目指したのはツキノのいる教官詰所だ。

先日はユウと一緒にいたためにゆっくりとした道行きだったが、今日は全力で駆けても問題ない。

靴に仕込んだ魔法陣に魔素を供給し、加速の魔法を行使する。そのようにして、教官詰所までを風のような速さで駆け抜けた。

「月乃、いるよな？」

「……いるのが当然のような呼びかけしないでよね、まったく」

扉を叩いて呼びかけると、程なくして均整の取れた体つきをしたツキノが高く結った髪を揺らしながら姿を現した。

「で、今日は何の用？ 返してもらった精霊石に問題でもあった？」

「いや、あれに問題はなさそうだ。今日はちょっどこいつの試し斬りに付き合っただけでな」

掲げた刀に当初気のない視線を向けたツキノだったが、数瞬もしない内に顔色を変えた。

「もしかして、最近姿を見かけないし、ユウが不機嫌そうだったのって、そのせい？」

「ああ。依頼があってね。腕慣らしに一つ」

「腕慣らしに作るようなものじゃなさそうだけど……わかったわ。私もそれには興味が出てきたから」

「ああ、頼む」

ツキノは一度機嫌良さそうに奥へと引っ込み、そして、藁束を幾つか抱えて戻ってきた。

「最初はこういうので試した方がいいでしょ？」

「そうだな。自分の腕を疑いたくはないが、死にたくはないしな」

「あれ？ 死人を出したくないの間違いじゃないのかしら？」

「いや、こいつは桜花出身のお前の方がうまく扱えるだろ。だから、月乃が使ってみてくれ」

「ふーん……まあ、いいわ」

ますます楽しそうな笑みを浮かべ、藁束を軽々と競技場へと運び込み、地面に突き立てる。

「じゃあ、ちょっと預らせてもらうわよ」

カロンが刀を差し出すと、少し神妙な顔をして受け取り、そして腰の物入れから懐紙を取り出して啜る。

「そこまでしないでもいいんだがな」

懐紙を咥えるのは、桜花刀の刀身を拝見するときの作法だと以前ツキノは言っていた。彼女はそれを忠実に守っているわけだ。大雑把なようであり、こういう作法については結構細かい。

「……………」

息を止め、目の前に掲げた刀を鞘から抜く。力まず、反りに沿って完全に抜き放つと、しげしげと刀身を眺めた。

しばし眺めた後、鞘をカロンに預け、正眼に構える。

構えの状態です。数秒してから構えを解いて、刀を鞘に納めた。

「見事、だな」

懐紙を口から外し、ツキノは驚嘆を露わにする。

「魔法剣としての出来は知らないが、刀そのものとしては申し分ない。では、早速試させてもらおうか」

今度は懐紙を咥えずに刀をすっと抜き放つ。その無駄のない動作は、カロンから見ても美しいと感じた。

地面に突き立てた藁束に向かって再び正眼の構えを取る。

静寂。凜とした佇まい。

そして、彼女は動く。

地面を擦るような、重心移動を使った移動法で藁束との距離を詰め、そして、同時に振り上げられた刀は右上から左下へのぶれのない軌道を描く。

ツキノは残身を解くと、藁束を見て首を傾げた。

「斬れた……わよね？」

「その筈だが」

預かっていた鞘で藁束の上部を小突くと、その部分が落ち、斜めに走った切断面を露わにした。

「何というか……斬れすぎ？」

ツキノの口調は苦笑混じりだ。

「抵抗がなかったわよ、これ」

「ああ、多分常時発動の切断魔法のせいだろう。刀そのものの切断力もそれなりにある筈だが、そればかりに頼ると長く持たないからな」

「まあ、それもそうね」

納得の色を見せ、それからもう一本の藁束に向かい合う。

「鞘を貸してくれる？ 居抜きをやってみたいわ」

「借りた刀でやるのか？ 随分と豪胆だな」

居抜きは鞘から引き抜きざまに斬撃を放つものだ。その性質上、鞘と刃を激しくこすって、刃を潰す可能性がある。

「そんなこと言っただけで、ちゃんと対策してるんでしょ？」

していても当たり前、という顔をされ、カロンも顔かざるを得ない。

「ならいいでしょ。それに、刃を潰したりなんかしないわよ。私の技量を舐めないでくれる？」

不敵に笑い、受け取った鞘に刀を収める。その際も鞘と刃が擦れることはない。

「さっきの切れ味だと、どこまでいけるか試したくもなるわね……」

呟き、そして、カロンの危機を察知して強く後ろに下がったと同時に、ツキノの腕が迅雷のごとき動きを見せた。

いや、実際に目に捉えることは不可能だった。

風が巻き起こり、高く結った髪が激しく揺れる。

「――ふう」

ツキノの残身は刀を鞘に納める直前のもの。

そのまま静かに刀を収める。金属同士がぶつかり合う、キンという音が鳴ると同時、藁束はおろか、それを地面に突き刺すための心材である木材までもが数センチ刻みで地面に転がった。

「おいおい、無茶しすぎじゃないのか？」

カロンの問いかけには答えず、ツキノは転がった木材へと手を伸ばす。一つを拾い上げ、詳しく見分した後、それをカロンの方へと突き出した。

「何だ？」

「断面を見て」

言われ、詳しく見るまでもなく、そこには小さな木の芽があった。

「木の芽だな」

「そうね。そして、それがあるのは切断面よ」

「……相生の力のせい、だとは思うがな」

ため息と共に告げると、ツキノは木材を放り出して肩を竦めた。

「今の言葉でだいたい理解したけど、これは桜花の魔法方式である陰陽五行に基づいた魔法剣なのね？」

「そうだよ。相生と相克を扱えるように、術式を組み込んである。そして、材質は五行の属性に応じた五種の鉱物を用いて、属性の付加を行った」

「五行すべて、ね。無茶苦茶よ、まったく」

声の成分は九割方呆れだったが、残りはまさしく『面白い』という感情が込められていた。

「無茶でも何でも、依頼であるからには遂行するのが私の矜持だからな」

面白くもなさそうに告げるカロン。やってくれと言われて、はいと答えたからにはやる。それだけのことで、実際には矜持以前の問題だ。

「私が口を挟むことじゃないのかもしれないけど……」

「ん？」

「危険と思った依頼は受けないようにしなさいよ」

「わかってるさ。でも、それは元凄腕の傭兵としても言葉かな？」

軽い口調にツキノは拳でカロンの頭を小突き、

「それもあるけど、普通に年上からの忠告ってやつよ。年長者の言葉は素直に聞いときなさい」

「あんまり年上って気がしないんだよな、ツキノって」

「褒められてるのが微妙ね、それ」

再び小突かれそうになった頭を腕で庇い、カロンは笑みを浮かべる。

「まあ、亀の甲より年の功って言葉もあるらしいしな」

「カロンって、ときどき桜花の物言いをするわよね。ところで、その言葉って、こっちではなんて言うんだっけ？」

「フロイスも広いから色々言い回しはあるが、大木は金の斧では切れない、という言葉があるな。もっとも、物質的な特性から見て、黄金で刃物を作るなんて、見栄以外の何物でもないがな」

「あんたってやつは……でも、そうか。年を重ねて大きくなった木は、輝く金属でも切れない、か。言い得て妙ね」

前半で呆れを、後半で納得を浮かべ、しきりに頷く。

「文化の違いってやつよね」

「ユウが聞いたら喜びそうな話題だ」

「ふふっ……あんたもなにかというとユウの話題が出るようになってきたわね」

「意識はしてないが。しかし、そうかも知れないな。普段から気には掛けている」

「まったく、素直なときもあれば、そうじゃないときもある。どっちなのかしらね？」

「至って素直な方だと思うが？」

「まあ、そうね。歯に衣着せぬ物言いは確かにそうよ。そういう意味では素直ね」

ツキノはカロンに刀を返し、伸びをする。

「さて、試し斬りも終わったし、私はちょっと休憩しようかな。ここのところ、机にかじりつきっぱなしで肩が凝ってたから、ちょうどいい運動になった。礼を言っとくわ」

「どうも」

背中をばしばし叩いてくるのを身を振りながら避け、カロンはツキノと距離を取る。

「じゃあ、私は術式の最終調整をするから工房に戻るよ。月乃も似合わない事務仕事で机壊すなよ」

「大きなお世話！」

鋭く振られた腕をすんでのところで避け、カロンはその勢いのまま走り出す。

「ユウによろしく言っといて」

「わかったよ」

背中にかけられた声に、片手を挙げて応える。

そして、加速術式に魔素を供給し、工房への道を駆け抜けた。

「いいなあ……」

ユウはカエデの手に握られた一振りの刀を見てそう呟く。

カエデがそれを受け取ったのはつい先ほどのこと。

「なら、ユウちゃんもなにか依頼をなさってはいかがですか？」

「そうは言っても……別に武器が欲しいわけじゃないし……でも、あたしにもなにか作ってほしいな」

カエデの提案にも少し心惹かれたが、よく考えるとこれとって欲しいものが考え付かない。

「服、とかどうです？ 魔法使いによっては、魔法陣を織り込んだ服を着用している人もいますし」

「服かあ……」

その発想はなかった。そういえば、カロンのマントも魔法陣の織り込まれた特殊なものだった。頼めば、似たようなものを作ってくれる可能性はある。ただし、恐らくは依頼の品として料金を取られるだろう。

「それはいつかお金を自分で稼いでからにしよう」

「そうですね。一応、あの人の仕事は慈善事業ではありませんから、お金の――」

カエデの言葉がふいに途切れ、その手が刀にかかる。

「何者です？ いえ、なぜ精霊がこんなところに？」

問う声は氷の冷たさを孕み、直接向けられているわけではないが、背筋が冷たくなった。

こんな声を出すカエデは初めて見た。

ユウとカエデの視線の先、草の茂みがかさりと動くと、その中から一人の少女が出てきた。ただし、彼女を人間と評するには一つの異物を取り除かなければならないが。

「は、ね……？」

羽。いや、それに近いが、いささか違う。有機的な輝きを放つ金属のようなものが形作る放射状の造形に鮮やかな朱の光が絡みつき、その様子が羽のように見えるだけだ。

「……………」

彼女は無言でユウとカエデを見、そして、視線はカエデの手元に固定される。

「もう一度問います。どうしてここに精霊が？」

重ねて問うた先、少女はつまらなさそうにため息をつき、

「なんじゃ、わしがここにはいけない存在のようではないか。ん？ それともそういう場所か、ここは？」

少女の、しかし、見た目の年齢とはかけ離れた物言いにユウの思考は一瞬硬直し、しかし、相手がもともと慮外の存在であることを思い出して気を取り直した。

「ここはグランベルが誇る魔封学園。その外周部には精霊を阻む障壁が幾重にも張り巡らされていたはずですよ。だからこそ問うのです。どうしてここに、と」

「ああ、そういうことか。得心した。ふむ……何と言ったものか。わしにとってみれば、あの程

度の妨害、妨げられたとも思わん程度だよ。まあ、煩わしくはあったがな」

ククッと喉の奥で笑う。

ユウは改めて少女の姿をした精霊を観察する。

艶やかな濡れたような長い黒髪は常に風に煽られているようにさらさらと揺れている。そして、小さく整った顔。瞳の色は背後に揺らめく『羽』を同じ朱。唇は薄紅を引いたようで、しかし、少女が浮かべるには不釣り合いな笑みがそこにある。

「精霊を見た目通りの年齢と思うなよ、小娘」

ユウの思いを見透かしたように嗤う精霊。だが、その笑みもふいに消え、視線は再びカエデの手元に注がれる。

「懐かしい音がする。その魔剣は誰ぞの作か？」

「答える前に一つ」

「なんじゃ？」

黒髪を揺らし、精霊が首を傾げる。その様子に注視しながら、

「あなたは何者ですか？ 障壁をいとも簡単に破れるほどの精霊ならば、さぞ名もおありでしょう？」

少し挑発するような物言いだ。しかし、精霊は動じもせず、

「ああ、名乗らないと人間はわからないんだったな。そう、わしはアリシエル。汝ら人間のような姓は持ち合わせておらぬが、あえて言うなら『アフィニターテ』。汝らの言葉に直せば、『親和』という意味じゃな」

カエデの目が見開かれた。

「親和の精霊、ですか？ しかし、なぜわたしたちにそのような力を教えるような真似を？」

「汝が挑発するから乗ってやっただけじゃ。それに、『アフィニターテ』の名を知ったところで、その本質が理解できるわけでもなからう？」

ユウはカエデの驚きもアリシエルと名乗った精霊の返答の意味も全くわからない。

精霊に関する何かしらの制約かなにかの話だったと思うのだが、うまく頭が働いてくれない。

「で、今度は汝が答える番じゃぞ。その魔剣の制作者は誰じゃ？ 見たところ、まだ作られたばかりじゃ。しかし、わしはその音とよく似た音を奏でる男を知っている」

その朱の瞳が懐かしそうに細められる。

「この刀の作者は……」

言い淀み、しかし、意を決したように、

「カロン・F・イルナリスという魔法使いが作成したものです」

「ああ、やはりあやつか。道理で、いい音がする」

耳をそばだて、音に聞き入っているような精霊。しばらくそうしていたかと思うと、その視線が動き、ユウの胸元に注がれる。

「汝の持つは四聖龍の涙か。しかも、随分と気に入られおる」

「もしかして、精霊石のこと？」

「そうじゃ。精霊石はわしら精霊の命の欠片。思想の乖離ゆえに相容れぬ者も多いが、汝は大き

な器を持っているようじゃな」

「褒められてるんだよね？」

言葉の内容が微妙に理解できないせいで、その判断に迷う。

「自分で判断せい」

しかし、アリシエルはにべもなかった。

「では、胸の大きい小娘」

「楓です。蘆野・楓」

精霊からの呼ばれ方にむっとしたのか、語気も強く名乗る。アリシエルは呵呵と笑うと、

「そうじゃな、汝らにも名前がある。それを呼ばぬのは失礼というものか。では、改めてアシノの。わしをカロンのもとに案内せい」

「あ、それだったらあたしの方が」

「ふむ。汝の方が親しいのか、あやつと？」

「一応、一緒に住んでるから」

「なんと！」

アリシエルは大仰に驚き、そして、その顔を笑みに崩す。

「なるほどの。音の柔らかさは汝が原因か」

「音の柔らかさ？」

この精霊、頻繁に『音』と口にするが、それは自分たちが聞いている音とは違う概念のような気がする。

「今ここで説明してやってもいいが、それよりもまずは案内をしてもらいたい。どうせ、汝も同じ屋根の下に住まっているなら、後でも問題なからう？」

「まあ、いいけど。でも、カロンに変なことしに来たんじゃないよね？」

「言ったろう。あやつとは知り合いだ。此度はあやつに少々頼みたい議があつて、わざわざこのような場所まで足を運んだのだ」

「そう……じゃあ、こっち」

いまいち釈然としなかったが、彼女に敵意はないようだし、カエデも名前を聞いて以来構えを解いている。ということは、警戒しなくても大丈夫なのだろう。

指で方向を示し、精霊の『少女』を伴って工房兼自宅へと足を向けた。

ユウの師匠である濃紫の髪を持つ青年の魔法使いは鼻の頭にしわを寄せた。

「そんなに嫌な顔されても……」

ユウとしては困るほかない。彼女の前に立つ長い黒髪を揺らす少女に視線を転じると、

「久しぶりじゃな、小僧」

などとカロンのことを小僧呼ばわりしていた。一層険しい表情になった青年はしかし、すぐに呆れのため息をつき、

「私と同年だろう、小娘」

「……そういうこともあるかもしれんの」

アリシエルが拗ねたように横を向く。

「え……てことは、あたし小娘って言われるほど年離れてないんじゃ」

「うるさい奴だの。どうでもよかる、そのような瑣事は」

至極どうでもよさそうに言われ、ユウとしては黙るしかない。

「まあいいさ、年齢のことは。それよりも、立ってないで座ったらどうだ？」

「そうじゃな。失礼する」

いち早くアリシエルが頷いてカロンの正面に腰掛ける。ユウは彼の隣で、楓はその向かいに腰掛けることになった。食卓を挟んで対峙したカロンとアリシエルはしばらく見つめあった後、

「世間話をしに来た訳でもあるまい？ 本題に入ったらどうだ」

カロンの促しにもしばし沈黙を保っていたが、アリシエルはその紅唇を開いて、

「頼み、よりもまずは報告じゃな」

一つ頷き、懐に手を入れて木片を取り出す。

「ほれ」

差し出されたカロンはそれを手に取ってしげしげと眺める。

「相変わらずこれを使ってるのか。いい加減作り直したらどうだ？」

「よかろう、別に！ 使えるのだから、新しいのを作るのは勿体ないしの……」

「貧乏性……貧乳……」

「胸は関係なかる！？」

思わず立ち上がったアリシエルにカロンは冷めた淡青色の瞳を向ける。

「口が滑っただけだ。気にするな」

「気にするわい！ というか、滑ったということは本音じゃろ、今の？」

「さて？」

とぼけるカロンと憤りに顔を赤くするアリシエル。

「あの……アリシエルーさんって用があって来たんじゃないの？」

さんを付けるかで一瞬だけ迷ったが、付けた方が良さそうな気がしたのでそうした。

「そうじゃ。ほれ、カロン。早くそれを見ろ」

「わかったよ。そう急くな」

カロンが気だるげに木片をいじると、空中に赤い霧が立ち上り、一つの形をなす。そして、その像は刻一刻と姿を変え、連続した動きを表す。

「……………」

カロンは目を細めてそれを見、そして、重いため息をついた。

「過激派の集会か？」

「ああ、そうじゃ。『親和』の力を使ってもぐりこんだ時のものじゃな」

「無茶をするな、穏健派のお頭殿は」

「このくらいなら容易いものだ」

ない胸を張るアリシエル。だが、カロンはそれを見ておらず、改めて霧の像を見直していた。

「穏健派の……お頭？」

カロンの台詞を繰り返したのはカエデで、その表情は驚きの色に染まっている。

「まさか、若い精霊がまとめているとはフォルさんから聞き及んでいましたが……まさか——」

「確かに精霊の中でもとりわけ年若いのは承知しておる。しかしの、若いからと言ってまとめられない、なんてことはないのじゃからな」

「それはそうですが」

カエデは納得しかねるのか、眉を寄せてアリシエルの横顔を見つめる。

「それにの」

アリシエルはため息をついたような顔で、

「穏健派の精霊は揃いも揃って高齢じゃ。逆に、若い力で強引にでも動かさないと、腰が重すぎて身動きが取れんのじゃよ」

「それって、ぼけて——」

「それは言わんといてくれ」

言いかけたユウの台詞を遮り、今度こそため息をついた。

「まあ、その年よりくさい言い回しもそういう環境で育ったが故だしな」

「その通りじゃよ、まったく。癖になってしもうて、なかなか治せん」

嘆くように頭を振り、それから表情を引き締めた。そして、カロンのともすれば冷たいと取られかねない瞳を見る。

「問題は過激派の集会の理由じゃ」

「おおよそ見当は付く。派閥を形成しているとはいえ、精霊の基本は個だ。しかし、それが集まったということはつまり、その派閥にとって重要なことを話し合った。この場合、過激派としての取るべき行動を、かな？」

「汝の言う通りじゃ。やつら過激派は近々人間に対して攻勢に出ると言っていた」

「ちょっと待ってよ」

ユウは思わず口を挟んだ。

「精霊は人と共存できてるんでしょ？ それなのに攻撃するっていうの？」

「ユーロシアとやら。汝の言い分ももっともじゃが……悲しいことに事はそう簡単ではない」

諭すような物言いにユウは心を落ち着かせるように自身に言い聞かせる。

言葉を継いだのはカロンの、

「お前がいた沿岸の地域では恐らく水に関する精霊と大地に関する精霊を祀っている筈だな？」

「うん。海には海竜ラギエーラ様。大地には豊穡のレーフィー様が」

「そうだな。一部の精霊はその土地の土地神のような存在として、うまく人間と折り合いをつけている。しかし」

カロンはアリシエルの方を一度見てから、

「こいつのように特定の土地に住まわず、浮遊している精霊の方が圧倒的に数が多い。そのような精霊は住みやすい土地に集まり、コミュニティを形成する。問題なのはこのコミュニティに所属する精霊の思想だ」

「それが過激派とか、穏健派ってこと？」

「ああ。思想はそれだけではないが、大別すればその二人にくることが出来る」

「でも、どうして過激派みたいなのができるの？」

「そいつはわしが答えよう」

そう言ったのはアリシエル。彼女は食卓に肘をつき、指を組んで、

「そもそも、この世界の歴史を紐解くと、精霊と人間はほぼ同時に成り立っている。しかし、基本的に個である精霊は各自が好きのように生きてきたが、人間は違った。群で生きる彼らは集団を作り、村を作り、そして、生きる糧を得るためにそこにあるものを加工する術を習得していったのじゃ。その結果、森は切り開かれ、水は濁り、空も狭くなった。人間の発展がもたらしたのは彼らにとっての豊かさ、精霊にとっての住みにくさじゃ」

「住処を追われた、ってこと？」

「端的に言えばの。そうして寄る辺をなくした精霊たちは互いに寄り添い、コミュニティを作った。当然、人間の身勝手に追い出された訳じゃ。いい感情を持っている筈もなく、さらにはそのコミュニティの近辺にまで人の手が入り始めたとき、ついに精霊は牙を剥いた」

「それがおよそ千六百年前の出来事だな」

「先史文明の崩壊……ですね」

「それからしばらくは人間も数が減って大人しくなっていたが、それから千年も経てば価値感も変わってくる。その上、精霊は人間より優位に立てることを知ってしまった」

アリシエルは嘆くようにため息をつき、

「人間は清里恵に与えられた恐怖を忘れ、また土地を拓き、そして、精霊は自らが優れた種族であることを知ったが故に傲慢になっていった者もいた。現在の過激派はその傲慢な思想を持つ輩が多く集まったコミュニティなんじゃよ」

そう、言葉を締めた。

「つまり、文明崩壊をもう一度引き起こそうとしていると？」

「さて、な。集会の内容を聞く限り、そこまで大それたことは考えているようには思えなかったが……」

アリシエルは難しい顔をして考え込む。

「焦らすな。続きを言え」

カロンの催促に渋々頷き、

「最初の狙いはフロイスじゃ。しかも、魔封技術が最も盛んな都市。つまり――」

「グランベルが!？」

「そういうことじゃ」

彼女の肯定でその場に重い沈黙が立ち込める。

カロンは木片を弄びながらの思案顔。カエデも刀をぎゅっと握りしめて険しい表情をしている

。正直、ユウはなにを考えればいいのか見当もつかなかった。戦争になるとしたら、それは守備隊の仕事だし、政治的な判断はそれこそ政治家の領分だ。

魔法を習い始めの身でいったい何ができるというのか。

沈黙を破ったのはカロンだった。手に木片を握りしめ、表情も険しく、

「とりあえず、このことは議長の耳に入れておく。そして私自身、防衛のための策と道具を用意しておく。アリス。お前は どうするつもりだ？」

「わしか？ わしは そうだな……ひとまずは 此処に 留まろうかと 考えている」

「そう、か……ならば、ここに泊まるのが最善か」

「そうじゃの。そうしてもらえるとありがたい。此処はあまり部外者が立ち入っていい場所ではなさそうじゃからな」

カロンとアリスは早々にそんなことを言い交す。

そういえば、カロンはアリスのことをアリスと呼んでいた。愛称かなにかなのだろうか。

「ユウ」

名前を呼ばれ、カロンに顔を向けると、

「こいつもここに泊まるがいいか？」

「いいか、って聞かれても。そもそもあたしこそこに居候させてもらってるんだし、断るのは なにか変な気がするけど……」

「そんなことはなかる？ 汝はわしよりも先にここに住まわっていた。ならば、先住者として異を唱えるぐらいの権利はあるじゃろ」

「そういうもの？」

「ああ、そういうものだな」

なにか納得いかなかったが、そもそも断る気もなかったので結局変わるところなどないのだが

。それを口にすると、アリスは表情を綻ばせ綺麗に笑う。

「感謝するぞ」

「じゃあ、部屋の掃除？」

すべきことで、ユウにできるのはそれぐらいか。そう思っただけの発言だったのだが、

「その仕事いただきーっと、先にただいまだったな」

扉の開く音がして振り向くと、無精ひげを生やした長身の男がそこにいる。

「リック、お帰り。今日はちょっと遅かったね？」

「ちょっと書類の不備があつてな。修正しに行った」

リックは今年の四月からこの学園で体術の教師をすることになっている。本名はリチャード・コマロ。カロンを含め、知り合いからはリックと呼ばれている。

「よう、アリス。何年ぶりだ？」

典型的なフロイス人の例にもれない茶の髪を掻きながらリックは気軽な様子でアリスに挨拶する。

「さあ、何年だろうかの。覚えておらぬ。しかし、汝も相変わらずの格好じゃな」

よれたズボンに皺のあるシャツ。そして無精ひげ。お世辞にも清潔感があるとは言えないが、服装に関してだけ言えば見た目が悪いだけだ。

「三年、程じゃないか？ 私が捕まっている間に会ったとすれば、の話だが」

「そのくらいか。お前がああなった後、すぐにこいつが訪ねてきたからな」

「様子を窺いに行っただけじゃ。勘違いするな」

「誰も何も言ってないだろ？」

しまった、という顔をするアリス。その様子を見てにやりと笑うカロンは人が悪い。

「まあ、とにかく部屋の準備はオレに任せというてくれよ。今日はユウが食事当番だしな」

「あ、そういえばそうだった」

アリスに出会ったことで、すっかり頭から抜け落ちていた。

「なんじゃ、今日は汝が作るのか。カロンだと思って少し期待しておったのじゃが……」

「む。それは聞き捨てならないよ。あたしだって、料理の腕はそれなりなのよ。なにせ、港の酒場で生まれ育ったんだから！」

「ほお。じゃあ、楽しみにしておこうかの」

アリスがくすくすと笑う。その挑発には応えず、カエデに目を向け、

「カエデも食べてくでしょ？」

そう問うと、彼女はしばし頬に指を当てて迷った後、首を縦に振った。

「そうですね。せっかくですから」

「よし。今日は腕によりをかけて作るよ」

「おう、楽しみにしてるぜ。んじゃ、オレは部屋の方やってくる」

リックは一度手を洗ってから廊下の奥へと消える。

ユウは保存してある材料からレシピを考え、下ごしらえを開始する。

カエデが手伝いを申し出たので、最初は断ろうかと思ったが、せっくなので手伝ってもらうことにして、料理を作る。

カロンとアリスはというと、久々の再開ゆえか、旧交を温めているようで、邪魔をするのはよしといたほうが良さそうだった。

普段見せない表情も旧友になら見せるようで、カエデもどこか興味深そうにその横顔を見つめていた。

カロンとアリスは工房にいた。

カロンは椅子に座り、アリスは辺りを興味深そうに見回している。

「で、何か作って欲しいものでもあるのか？」

一通り見終わり、カロンの顔を見て思案の表情を浮かべた彼女へと問う。

「まあ、そうじゃな。作って欲しいのじゃが……」

首をひねり、何とも言えない顔で、

「わしが人間になれるようなものは作れるかの？」

「どの程度かに依るな。つまり、お前の『枝』を常時隠しておきたい、という意味なら作れんこともない。だが、根源的に存在を人間にしたいというなら、それは無理だと言っておく」

「ふむ。どちらかと言えば前者の意味じゃが……しかし、後者の場合短時間でも無理か？」

「……人を殺めてもいいと思うなら、方法を紹介してやろうか？」

カロンが意地悪く言うと、アリスはしかめ面をして、

「いらぬ」

忌まわしいと言わんばかりに吐き捨てる。

「では、この枝を隠す方針じゃが。準備にどれくらいかかる？」

「長くて二日、だな」

「そうか。では、早速取り掛かってもらってもよいかの？」

「ああ」

カロンは部屋の隅に積んである箱の中から装飾のない腕輪を取り出す。

それへ、下書きもなしに鑿（たがね）で魔法陣を刻み込んでいく。

最初こそ、その様子を興味深げに覗き込んでいたアリスだったが、やがてそれも飽きてきたのか欠伸をしてはうつらうつらし始めた。

「寝るなら部屋で寝たらどうだ？」

作業からは目を離さないままに告げると、頷きなのか舟を漕いでいるのか若干怪しいが首を盾に動かし、覚束ない足取りで工房を出て行った。

「まったく……」

嘆息し、しかし、作業への集中力は欠かさない。刻み込む魔法陣は精緻にして美麗。一見しただけでは決して魔法陣と気付かぬような、そういうものだ。

魔法陣には大きく分けて二つの種類が存在する。一つは前文明が滅んだあと、独自の形式で発展してきた現代魔法の形式だった、幾何学的な模様と文字を組み合わせた魔法陣。もう一つは今カロンが刻んでいるような、前文明時代に最盛を誇った古代魔法の有機的な曲線を用いた魔法陣だ。

どちらにも一長一短ある。現代魔法の方は知識のある者が見れば一見して効力のわかってしまうものであるし、逆に古代魔法の方は魔法発動の速度を少しばかり削ぐことになる。

一瞬の遅れが命取りになりかねない戦場でならいざ知らず、普段から持続的に使う魔法には古

代魔法の方が良いことの方が多い。

カロンが黙々と作業に励んでいると、アリスが去って行った筈の扉から誰かが覗き込んでいるのが音と気配でわかった。

「楓か。どうした？」

作業の一時中断として、溜まった金属屑を小さな器に集めながら声をかける。

彼女は少し躊躇ってから部屋に入ってきて、

「なにか、わたしに手伝えることはないでしょうか？」

そう、控えめな声で申し出た。

カロンはしばしカエデの顔を見つめ、それから、

「では、頼めるなら床を箒で掃いてくれ。そろそろ誇りが溜まってきているからな」

「はい。では早速」

最初こそ断ろうと思ったが、わざわざ来たのに追い払ってしまうのも気が引ける。彼女も、無償で桜花刀を譲り受けたのを気に病んでいるのだろう。

カエデは立て掛けてあった箒を使って床を丁寧に掃いていく。カロンは作業に戻ろうとしたが、優美とも言える彼女の動きを目で追ってしまい、中断することに決めた。

「剣を持って何年ぐらいになる？」

空いてしまった時間が手持無沙汰になり、カロンはそう問いかけた。

カエデは箒を動かす手を止めないまま、

「およそ七年ぐらいになると思います。幼いころから各地を旅してまわっていたので、護身用にと父から習ったのがきっかけで」

「なるほど。しかし、蘆野家と言えば、桜花では有名な退魔の家系だろう？」

「まあ、母方はそうですね。でも、父はフロイス人で、しかも自由奔放でしたから。わたしもそれに連れられて、という感じです」

人生さまざま、という訳か。しかし、それにしあってカエデの魔法能力は優れたものがあるように思う。家の魔法を継いでいないのは今の話を聞けばわかるが、

「魔法に触れたのは？」

「実を言うと、ここ三年ほどです。秘境を旅すると言って、父がわたしをフォルさんのところに預けられてからです」

「ふむ……でもまあ、魔法を学べるだけの時間はたっぷりであった訳か」

「ええ。フォルさんもそれなりに精通した方ですから」

「まあ、な……」

カロンは狐目の男を思い出す。確かに彼は魔法に精通しているが、分野が偏っているようにも思う。というのも、彼の職業柄、地属性のさらに木や植物に関連した魔法は得意としているが、その他は理論は知っていてもからきしなのである。

「カロンさんはいつから魔法を？」

友人のことで物思いに耽っていると、カエデが顔を覗き込んできた。身を屈めているため、大きな胸が重力に引かれて揺れる。

思わずカロンは視線を逸らしてから、

「四、五歳の時にはすでに学び始めていたな。とは言っても、そんなころの頭じゃまともに理論を理解できてなかったが」

「なるほど。いわゆる英才教育ですか……」

「そうとも言えるな。代々魔法使いを排出する家系だから、当然と言えば当然か」

「代々ですか。ある意味、わたしの実家と似ているのかもしれませんがね」

「かもな」

相槌を打ち、伸びをする。

「お疲れですか？」

「ん？ あ、いや、そうではない」

「ならいいんですが。わたしの依頼を受けてから日も経たないうちに次の依頼を受けているようですし、体を壊さないか心配です」

「心配はありがたいが、趣味の範疇だ。無理をして体を壊すような真似はしないさ」

「そうですか……」

カエデはなおも何か言いたげだったが、結局そのことに関しては何も言わず、

「ところで、リックさんって普段なにをされてるお方なんですか？ 以前からずっと疑問で……」

ごもっともな質問だ、とカロンは内心でため息をつきながら思った。

「あいつの職業は傭兵だよ。とは言っても、結局は街の雑用が主。私に付いて学園に来たものの、こっちはこっちで月乃にこき使われてるみたいだしな」

「鎬木教官ですか……ああ、そういえば何度か一緒にいるところを見ましたね。それにしても、あの方はとても傭兵という感じには見えませんね」

「まあな。でも、剣の腕は確かだ。その代り、魔法はからきしだけどな」

「そうなんですか？ てっきり、普通に魔法を使えるものと思っておりましたが」

「ああ、才能がない以上に、本人にやる気がない。だが、魔法がこの世界の全てじゃないさ」

「それはもっともな意見ですね」

当たり前、という表情をするカエデだが、そうは思わない連中は多い。特に貴族は魔法と深いつながりがある分、そういった傾向にある。

カエデは感心しているのか驚いているのか、判別のつかない表情を浮かべながら掃除に戻った。

カロンも小休止を挟むことによってすっきりした頭でもう一度作業に取り掛かる。

工房の中には箒で床を掃く音と、鑿が金属を削る音、そして二人の静かな呼吸だけがあつた。

## グランベル魔法街へようこそ

<http://p.booklog.jp/book/46669>

著者 : shbeltier9

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/shbeltier9/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46669>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46669>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.